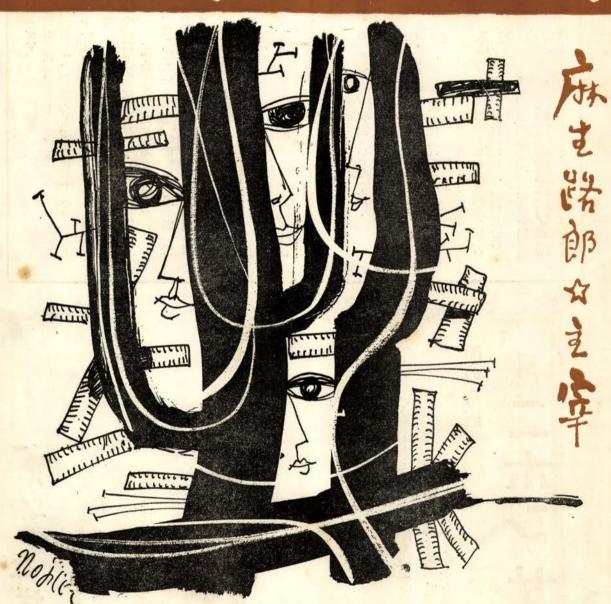
不是一个



11月号

Pensoj flugas trans la land-limon

THE SENRYU ZASSHI

No. 366

昭和第二年十1月1日発行第十二巻第十1号 (新月1回1日発行) 創刊大正十三年・通巻三百六十六号昭和第二年七月1日第三権郭慎物認可 (新月1回1日発行) 創刊大正十三年・通巻三百六十六号

社 JII 誌 雑 柳

化

4

A

所

時

文化の秋です。

十一月七日 (木) 午後 六時

作句の秋です、初心の方も来会を歓迎します。

一夜川柳三昧に浸りましょう。

大阪市天王寺区下寺町二丁目バス停前 明 寺 (電話切九二六〇)

貝数層のある海岸地帯・西宮から湧き出

良い酒に必要な良い水が湧く

なぜ旨い!

る井水「宮水」があり………

に最もよく伝統の丹波流技術を生かして

六甲を背に海に面した麓の気候風土は酒

酒造りの條件が揃っている!

でこぼこし (市電下寺町又は日本橋三丁目下車)

(二句) 麻

(計 句) E 丸 菊 沢小松 尾 潮 南

選選選

瘦 数

祖」

我慢」 題(当日発表) 替」 (三 句) 木摩天 花 郎

麻 生 方 郎

★ 路郎選天位不朽洞賞 戶 田 古

*

各題天位

与呂志・白水・東洋男・潮花・愛論・一三夫 Ti. 事 紫香・淡舟・賀峯・いさむ・十悟 拾 円

JII 柳 社 句 会

★ 投句のみの方は郵券三十円 電・住 同封のこと(メ切毎月五日) 吉命六 〇八一

灘

の清酒

灘



健康の酒として晩酌の日本盛一杯は緊張した神経を ほどよく開放し疲労の回復を助けます

西宮酒造株式会社

電話住古町六〇八一番

句会は

日

本

間 卓上 笑

「食

十二月 の本社

> 「大 一苦

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地 川柳雑誌社句会部

海電鉄の庶務課長時代に彫

川柳文学の再検討……

:田中

見……

普天…(三)

川柳に生きる葉光……

短詩街プロミナード

尻 生

路

全国の名物と川柳行脚…水谷

糞べらだんぎ……

:東野

大八…(2) 竹莊…(六) 豆秋…(回) 辰二…(10)

:酒井ひか平…(云)

彼は洋の東西をとわず古

呉れたのである。いびつな で、永年愛用して友情を偲 あるが、私の気に入ったの 型のホンお粗末な蠟石では いのに、会社を訪れた私に か」と別に頼んだ訳でもな ぶよすがにしているのであ って、「貰らってくれる

生

郎

ば寂びしくも見えたかも知 れぬが、忽然と消えて亡く る。彼の晩年は傍から見れ で、テンエージャ時代に既 は天才視されていたそう 市の出身で幼い頃に郷里で のである。彼は四国の坂出 に教員をしていたそうであ どはなかなか面白いと云っ 経の中でも、「善意経」な ていった。彼の著わしたお 宗教を創造してそれへ移っ し、開祖扱いされると嫌が 新興宗教を次ぎ次ぎに創造 ては誤弊があるが大したも って逃げ出したし、又次の 云おうか、開祖扱いされる 年には新興宗教の製造係と 研究していたので、その晩 今をとわずあらゆる宗教を

フ = + I

ト時の煙りなのである。 ぶん仕事をさせてくれる一 りの輪こそ、私に思うぞん それ等の郷愁かも知れな の輪をこよなく愛するのは い。ベッドの中での煙りの こころをとらえてくれる。 雲、夏の雲それぞれに私の 私が TOBACCOの煙り 秋の雲、冬の雲、 映画館の休憩室での煙 原稿机の上での煙りの 夜の料亭での煙りの 春の

にまつわれり 煙りの輪病む身の我れ

な短冊掛。それには今年 私のベッドの上のお粗末

> ている。 首が、私にいつも話しかけ その昔書いてくれた短歌 楽居(晩年白翁と改号)が そり死んでいった畏友池沢 月に誰にも知らさず、とっ

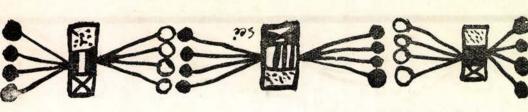
うせてひたすら思う永遠 眼とつれば大天地のあや のいのちを

それほど器用な人間だっ の他絵でござれ彫刻でござ 句も、川柳もやれたし、そ や額に用いている小判型の た。私が古くから色紙や軸 ても過言ではないだろう。 たが、歌も巧かったし、俳 れ、何んでもやれたと云っ 路郎」の落款は、彼が南 彼は歌人とは云わなかっ

かるような気がする。 なった彼の気持は私にはわ

11 月 目

本の 本 年 東 マ で で 年 東 東 東 東 東 東 東 東 で で の 指 ぎ で で の か ら …… 同川 北国大会に出席して…… 忙しい 鳥取砂丘観月吟行……(三天) 大阪市民川柳大会… 川柳役 川棚が入試に…… きく わえて 不朽洞賞 虚子俳話に学ぶ 一路集がルー 会 泥 に希 旅 導……… 杯む J.....須崎 豆秋選··(元)(重計) …八木摩天郎…(吴) 潮 花・梅志…(三) 戸田 麻生葭乃選…(三) 北川春巣選…(1%) 山田 田田口 ·若本多久志…(量) 麻生路郎選…(四) 不二田三夫…(三) ·児島与呂志…(三) 富士野鞍馬…(云) ……(三人) ······················(川) 一瓢…(六) 古方…(三) 季費…(三人) 家…(八) 嚴…(三) ...(111)





大阪市 中 島 生 × 庬

小児科へ父親おむつさげる役 痩せた子へお世辞に困る小児科医 大器晩成師匠は知ってくれてはる 智恵子抄を観て

何かと思う程広告マッチをつんで 豊中市 戶 田

古

方

今更に小我のわれの悲しゅうて

件のタバコ 一本もろてからねむる 大阪市 ili 場 没 食

子

断髪のあれがうるさい女秘書

旧姓で呼ぶ人もあり女事務 酔眼に映る名月いびつなり

西宮市

岩

本

多

久

志

台所の革命とかは月賦なり 真白い質屋の壁が冷たそう

潔癖の父愛用の蠅叩き 解らない曲関響はイイですね 宗達がどうのとだいぶ貯めており

旧友を訪えば脇門くぐらされ 旧友は元大将と云う生活 新発田市 高

沢

浪

奈良にて

黄金を蹴ってすがすがしく淋し 女房の方が金側時計出し 美しい入日も恋は背を向けて 悪妻と気付いた頃は左前 交叉点連れかくしたい人に会い ハッキリと時の流れを鏡見せ

愛情が問題ですと若い人 用心の傘は成程じじむさし

ホノルル市 築 山 快 夢 起

n E ラマアの積り引眉イヤリング デル住宅買えそもないの許り行き

金策のひと手ゴルフをやるときめ ディファーストそれも相手によりけりさ 57

大阪市 須 崎

吊皮も秋の夕暮らしく揺れ タン屋根てんぷら揚げる音で降り 大阪市 Œ. 本

愛情を疑い合って子を叱る 赤膚焼やまとの雲の湧くところ

飯食うていけいけとは主人だけ きたないものに脱いだ靴下

総がらみ篝火ばかり眼に残り

長良川鵜飼

月にいて月を忘れている二人 大阪市 丸 尾 潮

花

扇風機男へ廻る風がなく

ホノルル市 內 藤 草 郎

月賦とは見えぬ指輪の手を重ね

東京都 宫 田 不

飼猫の様に旦那を信じ切り 功績章またお年はとたずねられ

功績章はくも老眼鏡が要り

岡山市 逸

小包の中味下宿屋さぐって見 満足な眠り人形抱いたまま

米粒が四角に見えた植字工

秋

出て見れば 秋の色なり赤とんぼ 大阪市

退職金あとは死のうと生きようと 台風は午後やと頭刈りに行き さて次は法蓮華経に変えて病み

水

客

出雲市 之

むらさきに暮れて水引く葡萄園 葡萄園にて 大阪市

別染の浴衣を着せて浮気され 釘を打つだけでも嬉し新世帯

二十四時打つに聖書まだ閉じず 恋の花道月に野菊の咲く小 部屋中にこけし並べてまだ嫁かず

定年 気だけは後を濁さぬ気 大阪市 北 111

巣

旅に来て炭の安いを見て通り 子のつれの家出へうちもしんとなり

功績章汽笛の中で過して来 覚悟して来た病院を明るう出 おごそかに医長はあちら語で話 検便へ箸の二本をきたながり 岡山県 浜 田 久 米 雄

見 灯 竿

武 部

尼 緑 助

水 谷 竹 荘

約手ばかり出して飲むのは派手に飲み 失業をかくして今日もパチンコ屋



誘惑がされたい様ないい月夜 金出来てさてこれからと云うに死に 服 秘書気取りオールドミスの図々し

お人好又も女房に叱られる

府中市

弘

津

柳

慶

ぬいだ生活はすでにすでに女です

奈良県 西 辻 竹

清流を右に左にバスはゆれ

チ 晩年を思いたくない夢を持

古 田 圭 井 堂 想出の宿で銀婚静かなり 友情の祝盃互に涙ぐみ 定期券の裏は中村錦之助

無口だった妻が家裁でまくしたて 商用も兼ねた銀婚見送られ 東大がええとは親も知って居り

広島市 弘

怒る波悲しい波も海のこと 桶風呂にじっとしゃがんで物想う 気紛れの日々へ生活費がかさみ

再婚のあんな所に家庭を持ち 繁昌の奥で不遇な子が育ち

西宮市 沢 史

葉

東京にて

先輩の見舞寝てろ寝てろで去んじまい 電化して見たがヒューズは直せない

スチュワデス日本が近い声になり

兵庫県

西

無

鬼

うちだけと云う豊作へ気をつかい その笑い方さえ世間放っとかず

パンパンの中絶までも民生委 尼崎市 小

林

文

月

大阪市

冨

岡

淡

舟

後輩に君と呼ばれて 阿呆くさし

表彰状に感激した時や若かった 奈良県 飯

降

白

香

半 休

神殿へ新米ぎこちのう座り お祭の余韻横丁へ残しとき

恋人の前では東京弁になり

鳥取市 河 村 H

満

岸首相以下の花輪は数えられ 遺児部隊らしく歩調もよく揃い ジュータンの廊下へ僕の靴が鳴

共稼ぎミルクの空罐ばかりため 岡山県 島 鉄 児

大阪市 西 しつ to を

昼めし後人生観も株のこと 小唄なら教えてあげまひざ枕

岡山市

服

部

+

九

平

閉会の辞でもとボスへ役を振り 本当の楽器も擬音係持ち

火の用心自家の前でも一つ打ち 警察へボスに案内して貰い

青 会長も名誉がついて古稀近し 青春を札束数えるだけですみ

兵庫県

若

林

茚

右

ャンスだけ与えて呉れと折れて来た 井

蛙

金づまりオートバイまでかんを立て

なり

凉風にもう台風の匂がし

座長席みんな禿げたのが坐り

大阪市

足

T.

春

雄

金貯めたばかりに寿命まで奪られ 嘘の云える柄ではないと見縊びられ

株暴落不覚に箸をとり落し 氷山の一角見せた汚職記事

呉 市 林 野 甦 光

担送車花火へ嘘して帰り

不渡りと知らず車で取りにゆき 子供等の懐ろ見拔く紙芝居 子を生んで女無口で済まぬ

熊本県

有

働

芳

仙

台風が対策本部局

すかし

岡山県 直 原 t 面 山

停電へ電化生活炭を借り

大阪市

安

岡

珊

枝

郎

泥んこの手を岸さんのビラで拭

淋しかろと尋ねてとんだ邪魔をした

彼女にも云わずに置こう古稀なんて 広島県 田

季

贅

雪見つめて居たら失恋かと聞かれ 墓石をコツコツ作る職に生き

これで生きる人もあるなり闇の米 残り蚊が夕刊を読む邪魔をする

大阪市 Ш 本 葉

光

ひとさまの小遺程を手内職

近視眼どなたか知らず会釈する 倉敷市 村 容

起きてから寝るまで天衣無縫 弱点を見逃さぬ程女すれ ため息をついて老妻目ですがり 妻の愚痴きき手にまわるこの日 児 ころ



早起が人の新築場も覗

谷 光

郎

門限を云うて婦長が恋の邪魔 いざめのポケットから出た箸枕

大臣に服務規定はないのなり 村

味

平

タクシーが来る十分を又酌がれ

漫画で見れば総理もやぼ臭し

谷 谷 水

誰にでもワイロが効くと思うとり 露出性だなんて時代の要求よ なに一つとして夫君のものでないそうな 波

やるせない女中の不満猫をけり 頭から叱りとばして済む実子

岡山県

田

村

藤

何処に骨埋めるやからぞガード下 岡山県 田

生還を期せずビールへ突入し

診察に看護婦裙を直しくれ 退いて欲しい表彰式とも知らず

味気ない世へ爪切れば爪の音 逆境のせめて子供 へおどけ面

玉島市

日

井

林

坊

盃を持ち上げたまま異議があり 置き替えた机は壁の方へ向 3

下戸の箸ひっ きりなしにつまむなり 本 田

惠

朗

大阪市

瓢

三度目に連れ添うたのが藪睨み

二号の子あっぱれ遺産食いつぶし オジ様族と見たで居直ったか妓 の女あわれまれるが腑におちず

> 妻は又妻で重荷を負うてる気 老いたとて従える子に生んでな

借金の匂いも交る木の香り

二等車の隅 が赤線 京都市 松

水着ではもう飽き足らぬ審査員

お役所に予算がないか飲みに来ず

子の植えた稲にも秋の風が吹き 消防署おひまですかとからかわれ 皆生にて

月に浮く大山に妻を呼び

子が出来た途端に娘ケチになり 末ッ子の見上げるようなのと暮し

つり革も西成線は油ぎり

夜

潮

街録ででも大阪はぬけぬけと

倉敷市 村

利用価値尻尾をつけたエピフライ 小娘と油断したのをマダム悔い お隣はお隣ですと地味に生き 寝静まってから名月は冴え渡り

何でもなる大臣じゃ頼りなし 秋日和胸の掃除をしてみたし 長室ロ三味線が出る景気

信心の押売りだけは見逃され

こんなもの大作と云う映画館 墓詣りみんな祖母の歩に合わ 世

大阪のおでん恋しいのも秋か 挽歌」から抜け出たような女事務

倉敷市

井

春

H

秋風

勇退の耳こそばゆい美辞麗

が地帯めき JII 杜 的

萩桔梗バスはよたよた峠越

スクリンの明治大帝拝む老

始球式ヒョロヒョロヒョロと知事

0

腰

マスカッ

ト青滋の肌に翳を措

山市

津

田

麦

太

楼

米子市 森 本 法 泉 子

輸品

世間はばかる艶をもち

米子市

小

西

雄

敗戦後財布はもたぬ暮しむき

吹田市

本

男

ケットの場所が気になるニュー

E

1

F

大阪市

凉み台巡査も見てる詰将棋 新築へ麻雀友達来てはしやぎ

一本で縁談断られ

志

お見合は和服を着てと所望され 電話 ウエットもドライも居ます子沢

क्तं

高

崎

声

Ш

古

万

老婆の顔皺も貴きものに見る 台風で古い罐詰みんな売れ

明治生れにらしくらしくと教えられ

来て驚かすバスガイド

島根県 井

朗

岡山県

永

松

東

岸

子

島の灯が哀れを誘う秋の旅

女史と名はつけど夫に甘いこと

勇退も淋しきものに響く秋

東京へ嫁いで親の手がかかり 倉敷市 野 田

素

身

郎

夫との諍を何故僕に云う へ背広の肘はどれも拔

己評価してみりや先は見えており

Sn

大阪市 Ш JII

茶



アンコールもう勘忍と部屋へ逃げ 妾宅でくつろいで来る子沢山 名をあげて女の倖せとりにがし 選手権買って貰った平社員 働けぬ人もあるぞと云いきか くつろげぬ賢妻振りに気がつかず 鞄持ち社長の娘夢に持ち レデーファースト家ではやはり飯を炊

甘えてはおれぬ今日からマダムなり お得意でイイをして来る女給おき 大阪市 望

舌先きの味云うとれぬ病み上り 鮎 よりか鰯が好きよとおおせられ 大阪市 +

悟

褌の跡だけ白い夏終る アベックに腰かけられた異人墓碑 大阪市 達

煎じ薬の手を休め 堰 子

こおろぎへ

賴母子講 駅前で十二年間靴みがき 知らぬ妻なりそれでよし 不二 田 Ξ

大阪市

夫

原爆の世にも案山子は弓を持ち

きれい好き同志で夫婦淋し過ぎ 名月下日 しやいだ声でバカネが聞えて来 航誰を乗せて飛ぶ 名古屋市 酒 井 尾 0 越 か

社の手すり金の力で光っとり 大学出義務教育の娘に振られ 口に云う程気前よう出さず

名月へすすきはちゃんと売り切れて 神戸市 初 甫

> 冷房完備へさむいほが立つ九月 ステテコはテレビ喫茶の主人ら 大阪市

親子して帽子を忘れ傘忘れ 送る気はないが芸者も入れて撮り 食うてちょんそうやろなあと云えもせず 真剣に生きてんのよと女給云う 内風呂の窓から秋が忍び込み 井 文 秋

美しい そやさかいなどとアロハにそぐわない 妻へ一生棒に振り

岡山市

戶

田

喜

楽

知れぬ遺品

の銚子へ成程

ts

峰

どっち 惚れられているとは知らぬ儘別れ かが払って呉れるをじっと待ち 唐津市 新 岡 回 天 子

未亡人姑が邪魔な日もありき 池 田 古 心

惚れて居て惚れぬ素振りも意地と云う 東京都 石 居 高 志

塵払うて仲をあやしまれ 大阪府 早 電 清 話 生

新部長めし屋の顔をまず覚え 女子大も図書室さすが婦道の書 詩の会へ勤務医万障繰合せ 脱皮した演技をファンが承知せず メリーにごはんやってと歌舞伎座から

平.

代書から 躍如たる写真妾宅だけにあり バットーコ売るのに十時まで座 大部屋は熱演をして叱られる べからずべからずべからず長寿法 役所へトイレ借りにくる 1)

鳥

服だけを見てればよかった顔を見て ilī 辻 圭 水

方言を喋りたいだろこけしさん 交際をしろとは事前工作 中

地 玉あり元校長さんの家に

松

恒

雄

アプレの娘カンラカンラと笑いそう 大阪市 児 島 与.

呂

志

けば足音止まれば虫の声 神戸市 しきり 小 浜 牧

鈍才のベストとことんまで粘 嘱託の机は位置がまた変り 秋風へ月賦の口が一つ増え 周忌母の形見を染め直し

エスカレーターを子にせがまれ て無駄遣

倦怠期だけどおかずに悩んどり 女房の客は台所でも話し

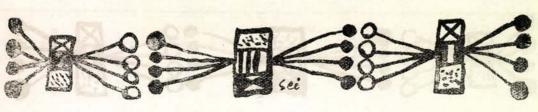
代書屋にまでも訊問されて来た 新妻に無血革命されており 名月へ浴衣が少し涼しすぎ 罰金を取るに出頭せよと云う

岡山県 池 1) 知 恵 美

恋へ嫁く娘の仕合せな瞳を見つめ 捨てられておんなじ月の下に住 朝顔の杖一本が風に耐え ほおずきを鳴らし十九の日に帰 蛛の巣へまたひと嵐くる様子 十月二日長女結婚 2

蜘

隣の子肩をかくさぬ娘となれり 煎餅を割って食べるのも見合の 大阪市 高 薫 風 子



糸ほぐす妻の根気を見て居たり 沢庵を噛むにも社長豪快な 子供等にママと呼ばせる後妻が来 暴君のところが好きやと妓惚れ 都会の夜セロリは母の香に似 恋あわれ 男が花の水を換え たり

つけで呑む店をへらせと意見され 曜の風邪を損したように云い 下関市 山口県 中 H 村 ほ 九 ts 呂 7 平

H

さわやかな秋へ放尿まだつづき トマトまで病にかかる不倖せ 手を拔いたとも云わず工事出来上 人形は腹掛けのまま秋ふかみ 本 蕗

よくしゃべる女やないか暑いのに 大阪市 戶 桃 村 児

天上天下汚職とストの世となりぬ 昼寝なとしてやれ慕参した寺で

女楽し齢五十でもくどかれて 米子市 石 坂 新

小机を置き職人の事務とやら キャラバン車職業意識で見て戻り 井

Ŧi.

茶

うんそれが人生なんだ雑魚どうし 新はよしレデーメードと云うなかれ 酔えば出るあの小使の枯すすき 貫祿は漬物石に すかたんの返事を月曜ボケと云う 似た社長 大阪市 西

晃

Щ

柿ですかト

マトですかと無駄な筆

長野県

高

峰

児

悪友へ妻ひっこんで茶も出さず 退院をしてから下手な詩を書かず

> 友達も通称だけしか知っていず 人の目玉がギョ 釜ヶ崎風景 ロリ陽が沈む

天衣無縫悠々質屋から学生 島根県 田 中 蛀 眠

子

ルフレンドに なってやったを忘れたの 名古屋市 野 田 念

ガー

夏の恋線香花火のように消え 岡山市 林 葵 Ŀ.

火元だけが火災保険に入っていた 呼びつけて警察感謝状を呉れ ニホームの方が負けてる草野球

神戸市 h to <

こんなものやっていますと名刺出し 展覧会見てやったぞと署名する インテリは数字でものを云いたがり 不正輸入芸者を乗せてドライブし

平田市 久 家 代 仕 男

汚職など出来ぬうるさい男にて 楼主達ひまか夜釣の魚籠を提げ 菓子鉢で蟹を這わすも磯の客 鳴子から田舎は秋 の音となり

同

詠

遊説はあたかも時餌する如し ひだの数が名のある山にする 松山市 前 田 伍 健

> 体温計近所へばかり役立たれ の眼葬儀屋てきばき過ぎるなり 和歌山市 秋 月

宏

方

二度の縁つまり人生中古品 浪曲の芸名あって出前持ち 竜宮の話知ってる熱帯魚

根かぎり空へ揚って見た雪雀 晴 齢のせいものをあきらめ易くなり 耕雨読明治の父の云う言葉

商魂はよろい戸にまで文字を書 大阪市 40 田

沐

天

翌朝の二人は風と共に去り お高くはおれどよろめく女社長

帰るのも予算に入れて嫁に出し ワンマンは

頭うちうち意地をたて 敦賀市 木

夢

考

ま活けた 菊を眺めて妻のパフ

今治市 原 宵

網棚に遍路笠あり伊予の秋

新児童ヴァイオリン・サ I クル

貴重な経験妻に逃げられる

千円のまつたけ薬にもならず

アート

奈良県生駒町本町二丁目一〇三番地 TEL306 X > 駒

町五丁目七番地 るみ 幼 稚

西宮市仁川

サ 教室新設については新児童ヴァイオリン・ ークル生駒教室へ御相談下さ TEL638バン甲

*

東 野 大

僕の友達で平光善へという詩人 月号の「文学界」誌上には手放し の賞讃をおくっている。

出したり、いたるところの座談会 得えたカゲがある。お手製で「伽 ると、案外なほどものの哀れを心 とに、その花はづかしき花嫁にく とだろうが、この神様やがてのこ 婚式をあげた。隻脚の身で、雲間 三百メートルの山のてっぺんで結 田信長がむかし城をきづいた標高 文化人の一人である。さきごろ織 県下では、すでにいっぱしの有名 にひっぱり出されたりして、岐阜 羅雲」という結構な詩集を作って 顔をしているが、落ちついて眺め ぼうぼう、顔は銅製の羅漢の様な ら替えされるのであるからいささ 交すとは、山の神もさぞ愕いたと のしじまを従えて、百代の契りを とだそうである。その解釈が文中 と大要つぎの様なことを、彼は書 にも出ている。 これは「しけつ」と読む。しけ をはいて登場する様な文字だが、 屋には無い。三校あたりまでゲタ いている。雲門の足はちんばであ つ、つまりそれは糞かきべらのこ 如何なるものでありますか」と で引下した雲門の言葉は……」 仏を糞かきべらと同一次元にま 問答を吹っかけると、雲門すか で、三十二相八十種好を備えた れは糞かきべらを乾したもの さず「乾屎橛」と答えた――こ

是仏。門云く、乾屎概。

きなボードレェルなみのその標題 ほど「雲門屎椒」という一文を 「文学ぎふ」に発表した。雲の好 さてその雲間の花ムコが、この なかなかの傑作で、 て門をささえ、戸をささう、仏法 して草書に及ばず、糞べらをもっ 貧にして麦食を辯じ難く、事忙に の興衰見つべしというその評唱を る。ちんばと糞べらの関係は、家

例にとっている。

屎橛という字は、町工場の印刷 ある僧が雲門和尚に「仏とは 雲門因に僧問う、如何なるが る。彼は、自らを便器のふちによ と云々。 しかに観音妙智の音声に通ずる」 せ、心ゆくばかり排便したその一 便の苦難を克服したかを書いてい 腿部を切断したそのいきさつを述 ピローグにとって、戦傷により大 いる。「軽快なる排便の音は、た 瞬を、歓喜愉躍の筆法で書記して べ、独歩独行よく自らが、その排 彼平光は、この雲門の言行をエ

ることを悟って感銘したことであ りあり、同じ不具にも応時懸隔あ が、その心底いささか察するに余 も、足での苦には及ばないわけだ る。だから相憐測隠の志はあって 彼の隻脚に対して私は隻手であ

門をたたいたが、中々会ってくれ ある偉い先輩につこうとしてその り、北京の陸軍病院でもきいた。 びこんだところ、そのとたんに門 ない。遂に某日機をみて門中にと 五家七宗の一派の祖たる雲門は、 雲門のことは、碧厳録にもあ

> き流した。同席したわが隻手の友 と私は学のあるその戦友の話をき る。ははあん、そんなものかな、 は閉ざされ、片脚を門にはさんで を覚えている。 は、おうむ返しにこう答えたこと ついに生涯の隻脚になってしまっ 一枚』の開悟をしたというのであ た。 『痛い』と叫んだ瞬間 "天地

返した。

つまり人間はすべて二本の手を 『無きは有るが如し』

ち有ることではないか、というの いということは、他人とそれだけ 前は、一本しかない、一本しかな ら結局は無きに等しい、それがお もっている。みんなそれがあるか なっては、痛いほどその意味が判 のものではなかった。だが、今と が戦後のふぬけ状態で、それ以上 私は考えたが、成程と思った。だ である。へりくつではないか、と ってきたことだった。 意味がちがってくる。これすなわ

私は、

"そちらが雲門なら、こちらは

せてくれた。酔うて常にかくくり は、よく酒を下げて訪れ私を喜ば こに置いてくれた世話人の和尚 のためのよんどころない仮屋であ 勝な心がけでは毛頭ない。住宅難 身をおいて開悟しようという、殊 カ月を過したことがある。山門に 里のある古寺の位碑堂に、妻と八 ったわけだ。民生委員で、私をそ 除隊後帰国して、私はしばし郷 だった。

得るところはしかし、時間と労力 と同格になる。そのハンディキャ 分を倍にすることでやっと他人様 下のことしかできないということ 本の手が一本だということは、決 はなしに苦にならないまでになっ の負担であったが、それがいつと が問題だ、と思ったのである。そ がある。私はその半分である。半 判りやすくいえば、こういうこと がみではないのである。つまり、 まり片手では普通人の三分の一以 して半分ではないということ、つ い一つの真実をつかみ出した。二 た。その満足感の中で、更に新 こに工夫がわき、思案が浮かぶ。 ップの差をいかにつめるか、これ になる。他人様はみんな二本の手 に当ることを覚えた。謙虚とはひ 職場でもつねに謙虚に事

を明らかにすべく努力した。 いう点を強調して、ひがみの所在 で話をしろといわれたとき、こう 私は、さる若い傷害者グループ がみだろ ひがむまい、そう思うのがひ

という句を、しやべりながら作っ てしまった。 という句まであげ ―同情を一番きらうのもひがみ

彼の作が名文であるか、それとも 門屎椒の平光から、こういうこと ……これはなんであろうか。 をつい書かされてしまったのは、 大分話がわき道にそれたが、雲

几

田

西では奈良に薪能の行事があったり五 大きな原因では無いかと思われる。 どを組織して 士階級とも接触面 れたり、 分して午前午後に本丸で陪観を差許さ 日に大礼能を行い江戸三百八十五箇町 持っていたのは幕府が将軍宣下や官位 れた能やうたいが町人階級に拡がりを (古町の分) の名主家主等を南北に二 むのは富裕の町 この 元来武 又江戸の町人階級のものが武 儀、 土地であるが 親しむようになったのが 誕生、 一士の趣味であり愛 人階級が中心であっ が多い為自然語講な 代替などの喜びの 勧進能などに 好 せら 親 関 戸は武士の都であるという根柢の環境 僅に謡曲をふまえるのに対し柳樽には という部 受けたのであるが其の中でも江戸ッ児 武士階級によって精神的影響を多分に 慮に入れるべきである。 む町人が関西に栄え、武士を中心とし を念頭に置かねばならない。工商を含 京都は職人の都、 目立って多いと見るべきであろう。 た淡泊な思想が江戸に栄えたことも考 て武士たり 私等が江戸文学を考察するに当って 歌われる魚河岸の者や火消し連中 類は芝で生れて神田で育ち云 談林の宗因者流の俳士 大阪は商人の都、 江戸者はこの

素材にそうしたものが豊富にとられ嘗

基地の如く取扱われているが、吉原も 戸文化の背景に吉原あたりの遊里

する謡曲の素材が多すぎるのを今取り て江戸に栄えた川柳文学に武士の愛

ない今日の柳人や一般社会人が、

たのに反し

士の都たりし江戸では能 いだけに川柳文学の

で江戸町人文化の中心では無い。

叉江 から

流を汲んだ連中と見たい。

関西に生

文学には沢山あるのに著目を要し

ってから頓に減じたのに拘 の素材を詞の俳諧を離

わらず川柳

H

の面影なく衰ろえ江戸座も謡曲

れ心

ここにそれは論じまい。が、

談林は昔

文学が談林や江戸座の影響を深甚に持 の一証左となり得る。後に起った川

ているのも争えぬ事実であるが今は

好 n

であろうか。

謡曲趣味が昔日の如くで

下町で活躍した作家や選者達もその

Z から 人であったのである。芭蕉の死後混 0 も角江戸の文化は下町文化でなく武家 士にリードされたからと思われる。 れる所となり町人はむしろそれ等の武 江 0 のごとく浅ましい小ぜりあいをしなか 収され其角及びその末流が関西の点者 遊興の場所で町人の勢力が増大した化 たる蕉門があの豪放濶達な江戸座 政期の末頃でも吉原 たのも一つは淡泊性にも基ずこうか 多く住む山の手中心の文化であっ 戸文化の中心をなす武士階級に喜 れに主として地方勤番の武 の客の三割位が 士などの 鬼 to 沌

土産」(元祿十年板)

にある前句附

た「難波土産」(元祿五年板)と

「江戶

確である。

比較するには両者が取扱

者の方が余程川柳調を帯びているのは

吟は達者だが名句はあまりないあの時 川柳の名を代表的にしてしまっ あたりの選句眼とを比較して見ると後 将西鶴あたりの選句眼と江戸座 にこなし得た宗因以後の談林俳士で記 にあらわれて居るが、 者となり川柳風の句も川柳以前諸文献 治に入ってからつけられた文字 如く貞門、談林、正風 叉考慮を要する点と思う。 も他の点者以上とは評価し 一名主柄井八右エ門川柳に の俳士連が入り乱れて前句附の点 に何故選句眼も作 (蕉風の名称は 謡曲などを充 既に上述 功を譲っ 難い浅草の 上の其角 たか 明 7

人物

など

があるのと

同

様である。

吉原

板

0

選者秋江

斎楓具は

山形侯

のお

\$

ある所

から想像

得

えない さみし 質が 来た選 駄句 初ややなずんでい もあ 樽 或は はあるものに執着するのを潔 欲 勝るもの は 1 K 0 何 去 心 断ぜざるを得なくなる。 多 ひかれて 妻子から 乱立する自称選者と違い当時 限や選者の 無理はない 求めたに違いない。 1 V は沢山存して心の俳諧のみとは言 必者の 経済 を表榜する当 なぐさみし ものを検出し も多 淡無欲でない 5 は 叮 家連に力を認められ立机 IJ 無常 笑味 無かっ 離れ 数 の許す 江戸詰をする諸藩の武 選 主観は 中で 事 から あっ 句に謡 は た初 柳樽」 年 を痛切に求めたも 古川柳を高揚するの 範囲内に於い たろうと思われ たであろう。 可笑味」にあっ 111 違いがあるが今日 得るのである。 時 ものを白 汚 (時には半年 曲素材の句 柳 代川 職濟職 が恬淡無欲、 0 の若い編 教義精神から その 0 柳 元来の本 を痛 0 腿 しとし て慰安 選 今日 0 視する なぐ 句 の事 が誠 る。 して 士: 憤 柳 選 も 12 禁 同 ts

俳諧に最 の解 H め、 も自惚に られる。 勤番の武士などに喜ばれ のこだわらない軽文学が地方から江戸 も無論沢山にあっ たであろうが慰安を小閑の文芸 、耽り二十軒に溺れる浅黄裏の生活に される 在来の 例の元祿十五年 似た気持を感じる武 花見車」 趣味を生かそうとするもの た筈である。 板 た理由 0 轍士著 士 もあっ 前 も考 K 局附 求 6 元

背景

も手

備

の智識も

欠如して古句

釈

すら覚束ないが為に只

ハ心の

む。 火の用心を守りて宿にのみ町人も 書卷一所載 じやう也とてあたらしくおもひかゆるに とりをすれば五六会出るともはや句並 るしの如し。 もむかくの通たち至りてとりこむ事う 状の間は巻々催すにより机に重り、 て白壁の中に気をつむれば、 ば より面白き一ふしも出くる也云々」 「江戸は遊興の地、 また武士は二 毎日毎夜、 こと更点者のうちこみに点 会合して点とりをは 一年に一度づつ見をかへ かりそめにも程遠 古郷への書 居 (全 げ れ 同

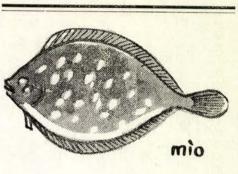
50 士が在 と述べているのである。 旬 此 集と 0 羽 種 いうつ 所に帰 前 の文芸を植えつけもするであろ Ш 形 れば風 田 の人々によって作られた 舎 曲 流漢は同じ在 紅 昌 江戶勤番 (安永九年 所に 0

梅 数改元年見 後半 篇、 名古屋の「 樽 守居あたりの藩士と想像されるが 筥 だけでも て勝れている句集と 玉川」 施裏」 傍柳」 種 7 々なものがあり、 重 市ケ谷初音連、 · (III) Ξ に比して遜色が無いば 初篇から二十四篇まで 垣 五篇未発見 天明三~六年マデ)麻布柳水連配り本五巻、内三、) 桜の 一十一篇(三十丁迄) 連等の 安永九ー天明三年マデ) + など 「誹風末摘花」 彼 Ŧi. 実」、 桜鯛」 の眼に触れた 篇 組連句 1/4 0 種多様 序に 玉柳 訓 飯田 (文政六年板) 風柳 初代川 も見えるし、 合 (宝暦十 町 (件込築土連 実に 中坂 多 专 (M (明和六年)寛 柳在世 及び七十篇 かりか 0 留 0 連、 一やない 「俳諧 他 は 拾 はじ 年 其他 雷門 の時 Щ 造 却 柳 板一 柳 + 柳 8 Ų 武 何 申 1/4

留 武 閑舎能晏 と記した如 しても誤でなく 士階級に 我好む誹 南橋北枳 も多く の風情に 譜 何 十十? れにも通ずるが 取り上げられたと 雅 も通ず」 は江 都を専 0 花見車 故 6 推 L

に武 定

> く観じ 思う。 十五. 愍を以て相応繁昌 名主として信望のあ となっ 最初は 得て国 名程のペ 部分には の記述も 终 Jj であり、 あてでなく抜かれる所に励み合っ 連で分明でも最初は名を憚っ であろうこ かっ 留 候 合の 暦 ように作者名が詳記してない もそれと察せられるし われる。 彻 留 合の 摺の 私不才のものゆ これ等の作家は微 などと慇懃な口 募集に当っ ると歴とし が洒落本程の袖珍形の小本であ 111 スの武士やイ 体名が記されて後の 作者名 ンネー 無稽では 初代川 から一 板本 摺物と違い道中の消閑 ように 柳 此 評 は現今残存している 0 0 柳多 層その名 読みにくく散佚 Jj 柳 4 もなく八篇 1 た武 仕、忝仕合奉存候、」 7 ないと 数の交錯 何 4 留 仝十二篇に連の一 合を拔萃した た初 テリに噲炙され 上を述べている 御定連様方御 士の裔で浅草に い所と世話 へ故事故句存 思わ 柳樽の最 々たる賞品 から も拡まっ 代川柳が 重 僅四 柳多 れる。 たから 板 のは の書物 \$ 易い 役を たの 1. 初 るの 憐 h か



わえて ロスパイプを 座

語る人々 清 水白柳 談 会

丸 潮

後 戶 藤 H 方 1:

いる古方氏が、 皆んなでなにか、やろうで マドロスパイプをふかして

れる。 はないか」と、巨体をゆすら 「麻雀か」と白柳子氏。 一人あまるから、一三夫さ 筆記してもらって、座談

会はどうかね」 いうことになって机上の校正 「そりゃおもしろいね」と、 「川柳を中心にして」 グラ刷が片付けられる。

こで見たものは、 九時前に行ったのですが、そ 幹部連が若い吏員を督 一この間、 税務署へ朝 机の列をつ

> べたのです。 時フト花村さんの句を思い浮 にぶっつかったのです。その 励して予算をとっている情景

税務署は鵜匠に似たる綱

潮花一句の構成もうまい。 **古**一僕がじいん―と引きつ

ころへ飛びこんでゆく鮎なん われわれ納税者は、鵜のふと てからめいめい散ってゆく。 によりをかけている。そうし よい実績を上げさせようと腕 に鵜匠に似たる綱さばきで、 詠んだ句は尠ない。それは正 しくあるが、こんな角度から 税務署を詠んだ句は実に夥

先生 よく分らないが……。 白柳子一この作家はいつも 古方一私には どうも税務署のことは (氏は高校の

> をふくんでいる。手腕は確か ているんだが、相当鋭い批判 がある。一つの比喩をとばし なものですな。

けられた句に、 麥畠高壓線はつづいてる

的かなと思いました。 一三夫一良さが分りませ この句をみた時、 僕には。 ああ川柳 香

何か思索的にされるものがあ ここに歴史的歩みがあって、 作り、高圧線も人間が作る。 のがよい。しかし麦も人間が 古一この句に人間のいない

ユニークな作品を発表して名 う気持をこの句へ注がれたか 潮―さあ白香さんはそうい

から

花 ね。 どうか。 釈が親切すぎると思います 私は、 古方さんの解

手です。 何かが不足している感じだ。 の写生句にはしたくないが、 梅一僕もそう思うが。ただ 古―私は穿ちの強い句は苦

るこけし ロづけを靜かに待つてい (左文字)

りをうけることもあるのです もそう願っている、 う。句品は高くし 柳による人間陶冶、人生批 この句のなかにあるように思 判、社会批判というものが、 考えている川柳といわゆる川 で人間だったらダメだ。私の 一飛躍しすぎて先生からお叱 これはこけしだからいいの 時による 私はいつ

うものは、なかなか骨の折れ はいけないのだから。 るものだ、句は説明であって ものを感じる。 白一誰にでもわかる句とい

潮ーひっそりとあたたかい

逢うたのも別れ話も中の

と思う。 場所の中の島もよく、一篇の 層によびかけてもついてくる であり、川柳的である川柳と 小説のようではないか。詩的 も詩的であり、これなら学生 ね。誰にでもわかって、しか して私はこの句を高く買う うっかりすると読み落す句 時間的の長さもあり、

しに。 全員一いい句だね。文句な 冬の町 芝居小屋たためばもとの (ほなみ)

けないのだ。 れは春の町でも夏の町でもい 町が実によく利いている。こ 小さな町にかかった芝居を詠 思うのですよ。これは地方の んだのでしょうが下五の冬の **白**一川柳はこうありたいと

いものがある。 潮一愛情のある句は捨て難

近すぎるが、見つけあいがい ところでしょうか。 たかく、やわらかく、 梅一愛情の句としては、手 友の会の作品ですが、あた 九十九まで符てぬ白髪を つけあい(きさ子) という

詩的なのが多いのは、 愛情をうたった句に、 路郎先生のおかげだと思う。 古一愛撫的だ。うちの句に どこえでも行けと蜻蛉の やはり

ほそい。 梅一潮花さんらしい。線の 糸を切り 花

ラマは好きですが私なんか一 が多いようですナ。 れはゼロだよ。明治時代の句 生書けそうにもありません。 古一豆秋さんには愛情の句 - 一豆秋さんのホーム・ド 句に愛情がなければそ

にこんなのがあった。 んだり 夕立にちんば浮いたり沈

古一冷めたい句ですね。 一おなじ足のわるい人を

てくる しまい風呂一本足がとん U

古ーそんなにショ気なくて

くる。 と、いうのがあるが、これな 湯気のようにほのぼのとして んか前のにくらべると愛情が

ように思うのですが、 いるのが、僕にはきつ過ぎる るとか、という文字を使って --一本足とか、とんでく 白一足の一本しかない人

作家の愛情がある。 ない、終い風呂まで待ってと その醜い肉体を見せねばなら んで来た。とこう見たとこに 風呂へ来れば大勢の人に

内では流しを洗う三助さんと れみをかけてもらいたくな されてもあまりアッピールし としては僕は落第ですね。 返ってしまいます。そんな風 行くころは足元が垢でヌルヌ 二人きりなんですが、ほくが 呂より行かない人間で、浴場 い。ぼくは好んで年中終い風 しょうし、人様から、そう哀 真昼ッまから風呂へも行くで ません。僕なら足が一本でも メなんでしょうか。そう説明 で一本足でとべばひっくり 考えるだけやっぱり川柳家 1 ―ぼくは川柳家としてダ

> よ。 ナリストだからそれでい もよろしい。(笑) 梅一一三夫さんは、ジャー

められたい。 この「伸びたい」にお目と もう少しやせたい伸びた 一女性の句で、 い娘のなやみ (美恵子)

潮

み』だ。(笑) ーーあつかまし い"なや

が『伸びたい』な。 潮一これ以上やせたくない

うですか。 伸びたい』(笑) いだからね。こういうのはど 古一ばくも、少し、やせて 白-八頭身は若い女性の願

でないと出せない味だよ。 古 顔がいい。そして動かん。 白ーセックスのなやみもあ 白一この美しい色気は川柳 全員一いい所を摑んだ。 春の顔 はつかけを撰る尼さんも ホルモンがある。(笑) (堰子)

性だね。 潮 梅一これは現実の母の姿だ ―世をすてても女性は女

に見られな 句は古川柳

いものをも

す役でいる

川柳とでも云いたい。ぼくに はアルバイトでしょうね。 は捨てがたい句なんだ。これ とも思えないが。 白ーそれほど深い意味の句 都会生活の中に生きている

ころに愛情がある。こどもの 古一お客がこどもというと

てやりたいですね。 がもつ、深刻さは男も味わっ ってゆく母のすがた。この句 潮ーきびしい世相の中で変 いつからか働く母の吸う (清生)

ますね。

古一最近感動した句に

男の箸に絹こしのもろさ

梅一この作家は勉強してい 白-赤絵具が生きている。 っていると思う。

みがあとを引いている。 これも清生さんの句です 梅一少女のおどろきと悲し

林さんを知っている人にはグ

白―目を患っておられる香

れを知らない人には、どうで

ッと迫まるものがあるが、そ

しょうか。

デパートにおもちや動か

かナ。

(笑)

梅一香林さんの奥様の句で

と良い句が出来ますね。

潮ーーべん入院してみよう

梅一入院なんかすると、

S

何に

こどもの

相当批判を身につけた人で と待ち 天罰のあたるを世間じつ 菜

ばかり 赤繪具 こういう (恵二朗

ヘリ

結婚式 場

しております 6階 ほか「貸衣裳一切を完備 室・美容室・写真室の (和洋9)御待合室・更衣 神殿(2)控室(1)宴会場

定体階 松坂屋

大阪日本橋

映 画 3 ナ IJ オ

17 生きる 葉 光

崎

to

豆

薬光と母とが鳩と遊んでいる。 な小春日和、天王寺境内で幼ない められ画面が展開される。のどか い上り、銀幕いっぱいに鳩が鎖ば バッとたくさんな鳩が空高く舞 あった。 朽洞会員となり、路郎先生の指導 即生活」の光明に浸って行くので や柳友にいたわられながら「川柳 (当時の

乳ガンで若くして死んだ女流歌

人中域ふみ子の生涯を描いたも

ので歌人で映画になったのは

一人目ですが、

代監督で「乳房よ永遠なれ」と 昭和三十年の秋に日活が田中絹

いう映画を出しました。これは

紙、大写し)

国的に有名な山本葉光が不自由 さきに啄木映画があり、これで な身で川柳に生き抜いている真 こそは路郎門下の異色であり全 この「川柳に生きる山本葉光」 も未だ映画は出て居りません、 俳句にも川柳に 車に轢かれて…… た時の或る日、 育っていたが、 天王寺にほど近い伶人町に生れた 温かい手一つにいたわられながら 葉光は幼少にして父を失ない母の 「王将」の坂田三吉が住んで居た 学校からの帰途荷 尋常二年生であっ ・足に大怪我をし って居り、

薬光氏の母堂以外はみんな実在

てしまった。

の姿を描いたもので登場人物も

無いものが出来るんではないか 房よ永遠なれ」に比して遜色の 構成によっては「乳 背負われて通学を続けて……やっ 無惨や歩行を失った薬光は母に

とも思いまして、そのシナリオ と尋常科を卒業してからは、専ら 独学で血みどろな勉強を続けてい

見ました。

の梗概を素人くさい筆で綴って

たが、ふと新聞の柳壇で川柳を識

ってから彼の川柳作句が始ま

伶人町の宅空襲にて灰燼、

終

梅一こんなのがある。十悟

闘帽、 居る叔父の宅へ疎開した。叔父は 大軌沿線あやめ池に近い鶏の里に れた鶏の里に広大な蘭の植園を持 ねて・・・・ の蘭も作った程の名人である。空 有名な蘭の栽培家で、あの景色勝 襲下の或る日、 開戦、兄の出征、 巻脚胖の戦時装で葉光を訪 時の満洲国皇帝へ献上 TとMの柳友が戦 薬光と母とは

名闡、 (鶏の里全景、 大写し 闡 の植園、

秋

川柳雑誌社の誌友、つづいて不 「川柳雜誌」表

みなんだね。 白ーそうそう。 梅一つまりこの句は玄人好

てくるが、 潮ーそろそろ話が下へ落ち

です。 にしている。 梅一「もっと 小便の句でもきたなくない 大自然はいいな小便もつ 飛べ」で川柳

いから。 者は若い人でしょうな。 潮ー三十前後でしょうか? 白ーそうだそうだ。この作 古一老人には作れない句だ ――第一、元気よく飛ばな

映写、

もひけはとらないな。 い。この人は男の中へ出して ないとこういう句にはならな 白一こういうのはどうだろ

全員一うまい 空腹の目にビルディング

というそのむつかしい所を酌 ね。ここに川柳の良さがある 面白いというだけでなくだ るかしらんと思うんだ。単に が。みんなに分かってもらえ んでもらえるかなんだ。 にはこれがいい句と映るんだ 白一さあそこでだ。ぼくら

さんの句だが 古一愉快な句だ。 梅ーオヤこれは失礼。(笑) ーそれは僕の句ですよ。 アドバルン大佛さまに持 たせたし

いやろ。キャンセルしといて んなことを書かされるのは辛 んまりうまい句ではないナ。 かめへんぜ。 潮一一三夫さん、自分のこ 白―ゆたかさはあるが、 (笑) あ

Ġ この句をとり上げて「作者 ーーふあうすと六月号のB 欄に出ていたのですが、 詐欺傷害売春西成警察署

心斉橋筋大丸前 電話②三三四四番

じさせるでしょう。 梅一ねえ。豊かなものを感

は川柳のつもりでいるのだろ

毎月十六日の晩は兄の仕払勘定

3

が背を丸くして居眠りをして

に影を落して、

が中天に浮んでいる。

END

暮れた一家は、 る……(句会風景)。 番台へ坐るー る風呂屋へ身を寄せて……葉光は 兄還る、家無く職無く途方に がこの風呂屋の二 田辺の親戚の営め 「葉光を慰める句 階で催され 日なので材木屋が来る、砂屋が来 忙 る、大工さんが来る、左官屋さん が来る。この会計事務で葉光大多 阿倍野支部句会会場への投句は電 で……句会会場では電話口で幹 その間にも今晩催されている

のGがこれを筆記する。

現在の王子町へ兄が居を構えて

川柳雑誌社本社句会、Sが軽オ

すがの大会場も超満員となる。

路郎先生選のラジオ柳壇の入選句 くなった。母、 が放送される。 でスキ焼を囲んでの団欒の一夕、 祝盃、 夜が明けたように家が明る 建築請負業がメキメキと 薬光の句が特選へ 兄夫婦、従弟、と 笑声渦をまく。 路郎先生から葉光へ授与される。 席まで」が背負うて行く。

薬光「優勝盃」を獲得、

この優勝句をGが朗詠、

優勝盃を持つ葉光(大写し)

柳雜誌社阿倍野支部句会(王子神 雪がしんしんと降っている。 111 母の死、

追悼句会、

黒枠の写真

(大写し)

交 那

#

「母を懐う句」

ぞよろしく」と言って雪の中を帰 犬さんの背中に……降り積もる。 社にてご、雪は境内の樹木に、駒 って行く母の後ろ姿!! ん九時頃に迎えに来ますからどう に葉光を乗せて出席する。「Tさ 葉光の母がカッパを着て乳母車 涙ぐまし 作の 間 朗詠する。

X

い母の愛情!

のほとり、粋をこらした藤田男爵 日 邸跡である。 乗せられて出席、 光も従弟のスクーター 会場は水辺に青葉匂う淀川公園 路郎先生の古稀祝賀大会。 踵を接しての出席者続々、 晴れわたった好天吉 開会定刻既にさ のうしろに

入口で車から葉光を降ろし句会の トバイに葉光を乗せて会場へ、 銀盃が た会場。 花束を持つ路郎先生 大盛会の模様(映写) 祝宴にうつる、紅提灯で飾られ (大写し)

男舞「わしが国さ」Mの渋い喉、 が切って落され、 中にSの素舞「白扇」で余興の幕 生の「勧進帳」、葭乃奥さ そろい浴衣、 ビールの泡が飛ぶ Bの謡曲、 路郎

とが碁をかてんでいる。横では猫 葉光を慰めに、路郎先生 秋の日ざしをうけて恩師と葉光 出席者の焼香、葉光 を幹事のG 一の訪 から Tグループの踊り、 やかなコーラスとなった。 出た出た』を唄い出したので満場 スやら、で歓果しなき祝宴、 品 しくも葉光が「川柳踊」の"月 が手拍子を合せてこれに唱和し 会場の窓から見える淀川の流 Gの朗詠、 野球拳やら、ダ まんまるい銀の N 0

> ろうとは思 で切るのだ く、行く間、 切るのでな

ことにもなる。 仮名ばかりもいけないという うか。こっちの脳がイケない までにもあるし、それでは平 ないと云うのでしょうか。 のかナーと書いているのです 、漢字ばかりだから川柳で 白―漢字ばかりの川柳は今

して まいな。 えている西成警察署を云い尽 田遊廓があり。スラム街を抱この句の面白さが分かる。飛 にくわしくない人には分かる 梅一私は西成署管内だから 実に面白い。しかし大阪 玲人氏は異色作家で

うまいとは思わないが、川柳 ているよ。 でないという人は、どうか

ーそれからもう一つ。 トイレーへ行く間男に提

取り上げる方が間違ってい

出来ないのじゃないか、と。 点を打ってやらないと、選が

たが、そういう選者には句読

潮-水客君も言っていまし

る。たぶん愛嬌なんだろう。

一句としてはズバ抜けて

行く、で げさせる 創 花

ありませんよ。こんなことを はないね。「間男」で差支え いのでありませんか。 「おとこ」にしたほうが、 ま」にしたらどうでしょう 梅一そんなことをする必要 文字をかえるなら男を

くなってきましたし、 間男でえらい迷惑をかけまし で、こちらの話もここいらで たナ。(笑) も早や沈みかけていますの ――そろそろスペースもな

幕にしたいとおもいます。 ペン・不二田一三夫)

、
く
早
目
か
ら
お
の
み
下
さ く早目からおのみ下さい。 ビタミン入小粒二〇〇円

うのです。 古 間を

から「オヤ」 成語がある 男」という

と思うと言

融通の 首の グラマー 焼 和 ない菩薩が子等の腑に落ちず 赤膚焼かま元に 奈良薬師寺吟行より 利かぬ 唄って善人寝 柿の青さが が売りもの拙い芸を見 もなく農 刑 夫 训 0 ŋ 足 色 6 ま 眼 急 ず 鏡 3 V 世 高 砂 त्रा

生 路

巢 郎 選 選

北

吉原 紅 月

雑草の

中で

採

第

R

娘

県

村上

旭

童

の句想は狭いし底をついたと云え

た。勿論小さな田舎町にいる私

私の句作は

低調であ 平

同

用 割

から

あ

1) 瓜 忘れずに買って帰れば気に召さず

体操も出来ぬ程肥え 売り切れて豆腐屋長い用を

ょ

<

笑

V

同 同

飲み助の子に貢ぐ程へそく 頰かむり夏には夏の

れ

ず

同同

らで一応振り返って見ようと考え

私は一つの

も離れて見て、私は私の句を此

ない事はない。一切の課題吟から

るボ

偉大な 秋風が虫も身に泌むように 座って貰う位置を決めるに 御詠歌の間を煙草吸 灯火親しむ頃と相成り子と 喰うものも食わず車券に 国税の無駄に触れな お隣と云う顔をして 採用になれば赤字の社とわ 〇号二号本妻寡婦 金言を座右に 爺で、爺でく云うて恩給みなとら 鈍才の養子が堅うや むっとして戻ればサンマ焼 産休の届は庶務をうら 事務服で腹をかくしてまだ辞めず 洗濯機もう負け惜み云うと ハイヒールは男にはかせたい二人 いる 線さえ君 ス雄 贴 秋 0 うて 鷄 2 0 思 P 気前よし ラ T 眼がいり 待 漫 5 n < < ま 鳴 聞 定 6 ス H V. か ち 書 3 画 会 す 線 煙せ 醉 n 姿 n 兵 阪 庫 ш 阪 県 市 市 板東千 永尾 本多 同同 同 同 同 同 江 同 同 同同 同 同 代美 幽谷 永断 と不覚と云う一語に尽きるのでは 作句態度と努力を一切水に流して 処で脱落されたものである。 しまわれたのは、私の目から見る にも好感を与えずに置かなかった 柳鬼奔花さんあっての事だっ 過ぎない私が、事の善悪はとも角 かったら、私の闘志は一層熱して として、 壁にぶち当り、のつ引ならぬスラ いたに違いない。一介の平凡人に た。薺花さんの思わぬ脱落さへな 導を仰ぐと共に、当面のライバル ンプはあえいでいたと云えよう。 た。そうなる事自体、 それにしても素花さんは惜し 私は当支部長小西無鬼先生の指

路郎師の御恩は特別として、

たと

60

師にも、

幾多の川柳家

此処迄進ませて頂いたの

家沢莠花さんを目標とし

偶然が続いて

れしきの事に凡人 姆さんの午後は醬油瓶

腹

から

立. 抱

6

頼りない

夫邪

教

凝

ŋ

始

尼

崎

rti

永

鬼美

を

古 85

同 徳 口 同

揮毫して色紙を只にして 五六行読むと睡魔が

L -

ま

Vi

本ばかり読み変人になって

行

入

n

も

付けで軽蔑し合 ハシャッ見たい

5

小

百

姓

同 木 ぼりがま若草山の見える

位

置

同

なる居り熱帯魚

99

一問市

Ш

監督が居るので汗が

金融の為の日

3

え かっ 8

困

蜻蛉ひ 掛

か

身につまされた映画を賞めちぎり 頼りない医者へくどくど質 ペンネーム持つてる女房に茶を運 成績発表でっせ下から読 まんざらでなしうしろだ見た女房 合格をしたと立読み 公僕と云う受 つね 礼 んで行 問 来る L 3 石 Ш Ш 市 瓜

宗高矢寸 虹

波

志



要

酒 井 O かい

生地 スッ 共稼お 金 母映画 天国で 失恋へ女の 大文字の火で見る妻は 教会へ行く日 未遂未遂無理心中が 秋が来た秋がまた来た夢 白粉のつきさえ悪い 雨やんであっさり将棋負けてやり 三次会まで待ってて 縫 八ツ当りだったと知ってほっとする 老らくの恋義やんで嫁きお 悪い事みな深酒のせ 金溜めて隣に遠慮せ 金の値うち もぐるとは云わず お駄賃のない 一人身の気楽さ秋も 年を恐れず大地踏 急写真にい 术 胸にあてればどれもな似合 いてからの思案は 6 いンにい 旅は胃 マダムもやは 住 も出そうな金のま V める自 0 を る母親 知らぬ 多い ワ ように お 0 かれた様な恋になり 掛 が 散 サビが鼻 信 6 お 風呂 性のあ からキャンツ買 程 冬 む n 月 事 12 ts い 小さ ま 逢 4 放 4 書 は い を 12 テ 女 共 から わ 0 7 行 る眼 りよう Ŀ 説 め 来 3 < E 着 来 す 散 8 8 す い 読 T to V な き ず ŋ き る ぎ ŋ ŋ 3 来 # ず いれ F. 歩 n 3 鼻 5 る to い 11 大阪 大 豐)N 天 大 岸和田市 取 理 霰 中 松 良 17: 府 111 市 媒 its

石川ひ 関戶宗 岡田花奈女 米 沢 同同同 同同同同 同同同 同同同 吉同同同同 11 內 同同同 同同 同 虫 藤きさ子 凡茶 史子 乃字 美喜 さみ 太郎

炎暑の

候と出

せば長雨降り

き

み

枚

カ

ıtı

顔

売

ŋ

討ち入りのように電車へ躍り込 サングラス掛けて金魚屋押し 略血のにおいに蚊共寄っ

感情を殺し

主治医は

7

る

き ち

塚

市

強し

恋たのしモカの香りの椅 職長になれず組合で

子で待

を

売

n

食

~ n

西

B

111

腸がないので西瓜

吞

みたいば

かりにみなり買って居

蚊帳

の内蚊が這入り込み夜の長き

月に覗かれ虫 火の車廻してまでも

降られるよい暮

伊

丹

rts

愛欲を描きつづけて

作

V

大

R

市

瀬

挽郎

1

F

が終り暑さがまたもどり

同同 広

"

クが見えて孤独になり切む

Œ

アベックの甲斐性なしが草から出

何時買 御立派なお召 気が付けば靨に惚れて居たと知 秋の夜を渋茶で妻と もう んだ老後リウマチで寝て てようやく出来た閑 い K 鮎より肉 不明と 物やと値路 も花屋は八 を買えと 向 云 5 分咲き 合 しまい

5

H

ш N. ġ 府 ifi 県 同同野鸡 田 波仲字呂 鵜汀 蓑流

金

伝票の よろこびの日より 廻れば貧しき家の た時 後は週 旅費は 自に クライフク も女 0 刊 準の U 備代 H 読 たたず 記を付 老 も ŋ け 領外生 8 1 けたがり 欠 す ま to 収出 ŋ 証着伸 い 守 ū 大和高田市 D 郡 大谷 岩 同同 川沙智 垣 H 月都 本村 子 家が行き当る当然の雲と共に、消

え去って行かれたのは残念であっ

たとも考えないでもないが。名作

同同小同同草同同杉同同 吉 本 III 深 本 静 観堂 醉 舛 鹤

なかろうかと思うのである。 の一句などは得 「金策の急かば 3

気がして来たのである。 然のスランプは実に永かった。 見失った。その時に突き当った当 の儘善花さんと共倒れする処であ さんの隠退を惜しみ悲しむ で来た私は、偉大な田園作家養花 てして妙。考えさせられる名句 は私なりに行く可き道を悟る様な たのだが、親身な無鬼先生から **養花さんの句風には教えられ** ンコンと眼を覚まして頂 沓花さんと共に学び、共に励 れ碁に座り」。 のが多々ある。 私 自身 の目標をさえ 0 私 此 余

0 い

ンゼンは世界的常識!

- 生々した男性美をつくる
- 爽快でヒゲソリがたのしい
- 新强力殺菌剤G11配合で-層强力/

桃 谷心順 天 館

妻配待蟷秋白鈴虫の粉虫が の置人の柄のが 猪突とも 無念ともベスナッ. 虫の声 子の 転任 曼珠沙華細き亡母の手をお 原子炉の火入れかかわりない暮 貧乏の気楽さ いなりずし 秋来ぬと頭が 朝現 春になれば びきの 雲の いり返 庫番 霧実 の柄買えば 似事にしては立派 断って のむらも 术 四 の話でも 作家の夢あきらめた飯をたき ともベスト尽 のような 愛深け ケッ 煙草 重きに です三百 もず もとの帰 柄とも云えず生地を までも気にして娘の 辞令吞み屋 お 見える若さを TI " 秋になればと痩で居り クイズのようなのも出る つまんだ 5 プ声が 古巣 れば歩 六十五 墓参が 気に ら女 邪 の気力を淋 ゴッしてる共 耐え ٢ 秋 金 < 3 V 魔 を ず から 来 0 を せぬ年に L 利 かる 飯 7 臭 日生 返えり しとう たとも な物 指は 拾 7 忘 聞 ts を 5 鼠恐 深 娘 받 合 3 < を 髪で拭 候を吊 きて居 待 \$ T のわさ 稼咲 13 \$ 7 3 思 そ 知 V. 6 るな か なす 7 5 ず 来れ to ŋ ŋ 3 水い れ 声 す型るぎ き 音り ŋ V n い来り 穗 85 L 告 n 大 gs 附 4 20 都 Ш 阪 部 松 野 Ш 將 県 県 H नं 県 711 712 72 市 杉同同杉同同本
た 同同塚脇 同伊同同 木下 同同 神 同 福 同同 村 同同 傍 同同 島 辺 伊 豊年 淀月 笑太 つよ 明 祥 城 静 幸 津 美 永 男 南 馬

休 林 高貴薬と云う一服は少なすぎ高貴薬と云う一服は少なすぎ間をのそれでも二号と別れ得かのとれても二号と別れ得がのとれても二号と別れ得がのとれても二号と別れ得がのとれても二号と別れ得がのとれても二号と別れ得がのという話すプランを練り直して社長ののろけ聞かされる。 友と 更かと 12 は聞かされる 蹴つま る いる け E # 0 玉島 広島 倉 奈 良 敷 知 τħ 県 県 木同同 半同同 林 同同 藤 村 出 里 博 同秀同川 荒同 山同 竹 木 田 ス 松風 i 承平 狂 風 子 を

御無沙汰をしました送金願 努力賞くらいは欲しい 事務よりか化粧が先にうまくなり 怒らないおやじとなって退 融通をきかして規定 なまじっか釣れた一 餌ばっ 八立小 タイル 路ついて改築費 で暮せば 長はベストを 中は 貌も を かり。"胃潰瘍が粥を** 便 腐とた 来てる りし 秋 妻に 背 0 7 つくすより 匹もてあまし 守 から を < H 麦 あ クイ 5 か 4 あ 3 向 を います さみ ズ 院 2 疲 る 埶 4 れ 出 岸和田市 裘 取 Ш 湖 巾 県 Th 市 北村 同 同同 植同同 石同同 橋万 山 岡 島 餓 次郎 武助 三歩 古 藤 人

詠まんとして詠み得られなかっ

は

な言

の境地を自なの努力と、著花 まんとして詠み得られなかったが、私は私なりに、著花さんが

の加合に依り

何とか此の沈んだス

ンプから何物かを摑んで立ち上

んが与えて下さったエッセ

ンスと

虚 子 田 俳 話 VC 学ぶ

貼紙はお

お断りす

る

紙 神

を

え n

大

版

市

生

貼住

十ワット

0

暗さ貧乏

5

誘惑の 一坪へ蒔ん

切符と

知ってい

いて出

かっ

大阪

府

男

を続け様と思うので

滅したくない一つの苦しい努力

えぐ方々と共に、

スランプの儘

く種

妻

は

妥

パ

チンコでよく逢う顔と一で逢

其の

他

大勢の筆

頭に

書き

込

ま

同

爱

仮

県

博人

る。その難しい増雲を此処らで突

破りたい。お互いスランプにあ

アをどの様にして表現するか

結局むつかしい問題なのであ

私の句のモットー たいと思っている。

モアでありたい。

然し其のユー はあく迄も

飲むだけを飲んで役員止めて去に

すり

新道

してオヤッと 虚子選の朝日俳 妻かなし人の嫌がる夜なべして 八月二十七日付朝日 思った。というの 增卷頭 朝刊を手 は

をモットーとして はいるものの、 という句があったからである。 近来俳句の世界でも社会性が叫 生活を詠むことが行われて 微頭徹尾花鳥諷詠 2/5 トトギス」 生:

お ナ 知 ンバー 6 せ

復 " " ハガ キでお問合 御入用 柳 雑 世下さい。 品の方は、 誌 社

冷蔵庫

形

の美

月

チ

+

支店から芸を見から サング 恩給はうれし 新妻を見せに ぜい内をもてあますの 浅草で食べた 案山子. 光陰を惜しみパ 妻子連れ 素うどんへ後 義俠心出したばかりに馘に舞扇買うて帰ったいい 乗れ院秋嫁く 仕 度 頼ん ならぬ 人生の ルー 障期 れぬ [畳半床 人しさが き上手などとおだてて子守さ 容師も見合と聞いて念を らびくを下げて空気がまと云 か持 から から美人が又も引き抜かれる。と門を残して焼けぶとりできないの記事読みながらもぐさまないのできません。 メラはち寝なるいと 間 日は目立たぬ様に ルが今夜も待 旅 1 ク挙げて駐在 たり見らせ 少 し 折 れってり見らせ 終 仲 たので父も 路に白髪 撲たれて泣 時 った頃 とは知ら の町で見 だるまが して呉れたに からの のネ 子田 来 鰻 停 チ 年 にいたみ 0 染 ジを捲 客先に かぬ子に育 t 0 Va た 値 3 所 8 S 同 1 か信濃そば 通り す | 竿を持 扇 は to 利子がっ 办 を から -玉 淋 出 風 秋 東 買 な な機 -6 0 変 V 機 音 n () n 1) ち 祭 1) 嫌 来 П わ 1/2 独 痴 H 大 胎 石 西 大 Æ 2 M Bi: 大 Ħ 高 開 洒 學和田市 根 檢 26 阪 润 本 * Bi 版 Z yk. 砂 H gg. 供 県 ıtı 與 展 府 11 媒 市 吉村 松下 菊地 同鈴 道同 樋同 河同 青 松同島 同 竹 高野むじな 同 同 酒 同 同 津 笹 田 回 同 福 П 井 內花代子 П 柳 田 扇子 虫 自 茂輔 一迷施 丹韶 紀久 干 面 光

扪

仙

アン

プルに

一輪活けて病

んで居

同

水なんぞ買いなさんなと祖

母

なななの

板倉

簡易水道を引く

印捺しただけで他人の

П

を

100

47

林

護川

193

木村諷子 券茶の香 店佑 水泡 捕 遊 よく = 1

グ

浮気し 料亭の 長い 横綱 五尺八寸十九 貫一たまに手伝えばサ 吹けばとぶような男 言葉より とくほんの 小農の早苅り プレイボー 食逃げの 思 引き戻す様に 千円 家計簿に今日より としよりに 案する瞳に デーに 目で日 0) をくずす ヨンでなくてよ 出して 炭 安 足を 淚が 背とそして 坑 本バレ 跡を気にする ルつまり 箕 唐戶 别 胡 先 面 自 女 節 瓜で の猿は愛 れに引くテ 聞 から 15 慢 Ì 叩た U かっ を房 値 魚 いかっ ンパス を見 玄関 下上 値 6 朊 脛 が出 外 種 母 < 0) 0) 切 急 か 書き込入れる の母男た 黒 を を 支 革 稽 35 6 秋の ないないな しよう C 握岩 3 3 振 田 野 聞 古 to 節手 きめ い肩 뒘 球 事 大 大 28 332 大 笠 大阪 殷 阪 胶 阿 飶 N 採 R 100 143 府 姚 H'S 谷沢 家根 寺杣 安同並 H 野 土守 米浪 小谷 同 同 间 同 里 [ii] 同 同 Ŀ П 一美惠子 印之助 進之助 好佑 蜻蛤 抱 花 仙 + 真 2 奇 車 Ш

特売の 気紛れな男 貧しさへ月 わむ 星下は 7 クと れ 恋とは へ意地 丸さは の海ビ から か 漳 5 にでも 聞 世 堂 へだて 0) も 間 艺 + 冷 3 夏 産 心 水 to 俄 な 1 V 丽 目 12 32 4 無 部 版 柏 × 171 縣 平田 竹內 同 同 越

7.

~

にしてこの句を見るとは……。

0

牙城を守り続けて来た虚子の選

上は

同 義夫 秀敏 実 T 男 里

0

10

柳界も全くうかうかしては居れ 時代とは云うものの、人間調

詠

ま

三文 梢 石置 花火見る旅のつかれ 同欄 の句で他

きしままなる母

の墓洗ふ

によろめ

佐保女

抱

护

りと

5

向

1

华

意

話」には、五、七、 などもあっ また、俳壇の欄に 五と題して 続く「虚子

押しつめた究極のも 俳句の十七字(五、 安易なものではない。 極めて平たん(担) かりそめの十七字ではない。 かして重大な意味を運ぶも めて簡単な言葉。 つの。それ以は 0) 俳

柳雜誌 社特製 る。

去にこの

句だけはと云いきるほど

の究極の作品

があったかどうか。

の痛い言

薬

7

は

あ

であってはなるまい。

身をふりかえってみて、

過

本当に川柳もかりそめ まことにもって至言。

の十

七字

外にはない

唯一のも

00

(後略)」とあるが、

柳

投句

用

冊(五〇枚綴)三〇円 料 (一番分) 八 円

0

大

NZ

and the same who will also will

無精ひげ鏡にうつして好きな道大部屋だけ、好きな道大部屋だけ、 宿題が親子を 灯 火 親 里出悔 慾の道 女なり云わぬが花をききた ジ停 エット 帰り 電 一敬遠しとく村 原 機が過ぎるまで待つ立話 0 友のたよりはタ 鏡にうつしてそりもせず 揃えて村 子 水引派 手に てみた 魚を聞 たか故郷の山もはげ K 知ってるエ 炉へ 試合 生. を見てと 天 才 V 続 で ニ 峯 根 年附 1 火をとき ピソー 派 プで来 手にきせ から + 転 ま 立思 かの拒 役れ 7 Ó 3 L 0 場 ず 年 3 1) れ 世 7 1: V 石川県 金沢市 米見市 大 奈良県 松山市 石 先 福 西大寺市 善通寺市 Ш 知市 辺市 山田 Rb. M 版 施 展 阀 理 県 県 秋岡 大松橋 井 小三 王室 田崎 杉木 十 倉上 鰯谷 十 一 春窓四 旭 音 養 春 孔 九 子 也 吉 城 呂 峯 子 雄子 仲野花鶴 平同沢 能須関村藤 斉中 安平次弘道 一谷三思 田 浜嶮多路 柏蘭坊 十三楼 1 ハナ 吟 唐 俊 平 衣 江 勝三 5

釣がないから一円は 客 が概場出て空気のうま い 田地のでが封建打破してゴールサンマ焼く母の廻り に 秋 ル 大きく書いたまりません。 を電でさっき飲み、 を電でさっき飲み、 を電でさっき飲み、 を電でさっき飲み、 を電でさっき飲み、 を配けたとも角研験が近く車窓を が成めたたきく書いた。 連休はよい父さ サ樟ン 煙突のストで淋しい 美 貧乏なればこそ新穀を先に 牛 7 ロ休ハは ic の探究高い化 があるぞと図々しくも 似て んも月を見に出る下戸の て手術をこばみ 塗ってもほし 口が達者でみとめ -屋箸の値 父さんに も愛嬌 窓からほめるよいみの 主窓を拭の砂路に 飲み屋の娘 研談強 0) いて 粧も苦にな 服 ほがて 3 10 も 0 U つ割苦び の売い会急が 家 麦 秋 んで行 い朝 ٤ が田 ル 出 忙 5 判 6 8 行 0 5 負圃 1 逢 顔れけ す 9 1) 0 寸 1) F 1) V 道 2 6 家 V 岸和田市 空間中 大阪市 学部 K pri 西宮市 1/8 明明 島原 馬 形 作 沢 123 子 爆市 宮市 ili 級 松 松 水 庫 施 th it 中光河 高高平万

越遠荻岡菊小原久吉永山鎮藤木谷佐西山田神小細村三中光河位尾松高高平万智山原崎地島田米川松田浪原山本内岡內中庭田川上上野好本守井井瀬橋田仲 ・ 一一竹祥白ぎ綾良悦道圭錦凡二愚隆洛俊狂詩柳千珠芙四陽牛柳乙狸幸蟠越一 水雨郎月葩す女子子雄都花倉路坊文酔児二郎叟種絵路郎子子子三翁路蛇舟進

14ローゼをふっとばす

(催眠鎮痛剤

【健保適用

ブロバリンはもちろん が取れな鎮海剤としても 大へん広い用途を持つ 大へん広い用途を持つ 大へん広い用途を持つ 大のはいる、又一方 健胆法もその一ツ…… 使用法もその一ツ…… を時にいつも二十三錠 を時にいつも二十三錠 た時にいつも二十三錠 た時にいつも二十三錠 た時にいつも二十三錠 た時にいつも二十三錠 をあまりクヨクヨせずに のまりクヨクコせずに のまりクヨクコせずに 習慣性や副作用の心配がない 催眠鎮痛系

ブロバリン

30錠 60円 100錠 150円・医家用には粉末 25g-

日本新薬株式会社

名突破も間もないこととおもう。 い顔振れが非常に多かった。 催される。十 月句会は新ら 日本座敷で開 つもの下寺町 後六時からい 十一月七日午 一丁目光明寺 本社句会は 会



電鉄川柳会は十月廿一日午後六時 居で開催麻生葭乃女史出席▼南海十月廿二日午後七時半から珊枝郎 期していると。兼題、広島城・臨 同人、神戸新聞社顧問▼第五回広 会文化部杏林川柳会(大阪市)は なみ。席題、当日四題▼南区医師 時便・真実・愛嬌・近代化・たし 川雑広島支部が当番に当り盛大を 月十日(日)開催されるが本年は 島市民川柳(文化祭)太会は十一 で開催される。同氏はふあうすと 山本通四丁目兵庫県歯科医師会館 話、三条東洋樹氏▼延原句沙弥氏 兼題、無言、佳話·魂胆各三句柳 神電鉄西宮駅北側労働会館で開催 会は十一月三日(日)十二時半阪 塊人氏▼西宮市文化祭市民川柳大 ス修三選・口紅銀界選・柳話堀口 知恵・紋太選・自慢伊知呂選・バ 十月廿七日(日)十二時半生田区 時半阪神尼崎文化会館で開催兼題 (神戸市)の還歴祝賀川柳大会が

は九月十五日夜慈仙寺で開催▼川美笑居で開催▼川雑広島支部句会 方クラブ秋季川柳大会は柳翁忌の半粉浜親和寮で開催▼国鉄岡山地 米子支部句会は九月八日午後一時 島県)は三十周年旬会を九月廿八 九月廿一日岡山第五鉄道寮で開催 川雑高知支部句会は九月二十二 迷窓居で開催▼竹原川柳会(広 頗る盛会であった▼川雑 柳大会は柳翁忌の

精々多数御出席をお願いする▼堺 回川柳大会は十 民川柳大会(市 労働会館 された。 県・市・博覧会主催で盛大に挙 部十一月 気を吐いた▼大阪府警察本部文化 高知支部の作品が毎日新聞のサン 署訓授場で川柳句会を開催▼川雑 会は九月廿八日午後二 洞の両氏が優勝カップを獲得して ける近県川 雑下関支部句会は九月十五 大牟田博記念全国川 で開催▼尚同支部は山口市に於 廿七日(日)大牟田市民会館で 由ご健吟を祈る▼川雑岡山支 文化欄に掲載されることにな 司会は農繁期のため休会 柳大会で九 柳大会が十 時、旭警察 呂平、侃流 日下関

は畢生の事業として官幣大社生国られた▼木村無名林氏(大阪市) 別雨に を秋色したたる雲仙国立公園まで 佐賀県小城の墓参を思立ちその足 柳句会を棒にふって夫人同伴郷里士(大阪市)は九月廿四日杏林川 る」の句信があった▼牟田一哲博 漁に面して古るい開港場眺望絶佳 踏査された。平戸島は玄海灘の荒れ同港にのこる数々の南質遺蹟を 参川柳社(大阪市)は明年一月十郎主幹と十年ぶりに会われた▼番月廿三日不朽洞を訪問、病床の路 本唯然氏(大阪市)の御案内で十の主宰大島蕩明氏(熊本県)が奥 のばし観光ホテルから「精進とは である「雄大と絶景此処で握手す 岡市)は十月五日肥前平戸へ赴か 「全国川柳作家大会」を大手前会館五日関西川柳社創立五十年を迎え で開催すると▼速水真珠洞氏(福 せんば川柳社(大阪 降り込まれ」の雅信を寄せ 柳社と合併した▼柳誌噴 市 奥煙

で打ち切る由。予約申込先東京都共)明年二月刊行。四五〇名限り 練馬区南町五ノ七〇二五川柳研究 独地藏」予価金二千円(書留〒 品▼川上三太郎第三自選句集「孤 青堂集、川柳新書刊行会発行非売集) 奥室数市集・(第24集)渡辺 集・(第22集) 娴豊次集・(第23 いたが十月五日 へ入院、御全快を祈る。 (大阪市) は日 川柳新書(第2集)山 東都柳壇 本卓三太

○丸、迷亭ほか錚錚たる面々であ四六判一一八頁)同人は太郎丸、四六判一一八頁)同人は太郎丸、 長屋連。 都中央区日 のだが頗る美本。(第九・第十輯 集。句集と雑誌をかねたようなも の所謂うるさがた川 社▼句集「ながや」は、 本橋人形町三ノ四川柳 柳長屋連の句

掛け終 光秋人氏(山口県)は山口県下松城東区今福南二丁目八へ移転▼德本・本田東地で、大阪市)は大阪市 新築移転「秋空へようやっと巣を 局区内末武下歌ヶ浴二六七の六へ 木下 り」の句信があっ

八日永眠された行年五十五歳謹悼三十郎氏(大阪市)の厳父は十月 歳謹んで哀悼の意を表する▼岡部 渡辺暁童氏(愛媛県)の厳父 月十一日永眠された。行年七〇 月永眠された。謹悼合掌。 幽王氏 (大阪市) の母堂は 紳婦吳家靴洋

谷市立桃山病院三階一三三五号室 興され九月二十六日午前十時正遷 宮率祝祭を施行した▼土井文蝶氏 魂神社境内に浄るり神社を建立復 肺浸潤のため細工 頃頭健と見られて

(さちえ)と改号。

藤本千

永さん(大阪

府)は幸

灯籠まつり句会

市民文化祭第十一

写真は体温川柳会(日塚市)千石駐敷撒

旅」と訂 社

行目を「胴巻きも明治生れの腹に九月号古稀祝賀川柳兼題旅の内二、選句中一両とあるは一雨に訂正▼

るは晃康に訂正▼十月号一路集入

十月号一路集入選句

誤

たい。尙、日・時・兼題・場所等であるが紙面に限りあること故前であるでと故前で限りあること故前のようお手配を願い 大阪市西成区玉出新町通一丁目十 御明記のこと。▼川雑西成支部が 番地に復活した。支部長は後 評である句会予告は今後続行

電気器具 士人 服服服具鞄品貨

い安い質よい のデ パート 十ケ月 堺



士博郎五惣澄魚の上壇

大阪 第九回 市民文化

祭

ることを立証し得たわけである。

毎 日 新 聞大阪 本社

会 場

講

べられた。 年で第九回を迎えたよろこびをの

市民川柳大会を迎える。 社講堂は、菊花の香りもさわやか に、きょう10月13日(日)第九回 大大阪の文化センター毎日新聞

である。諸学校も雨で順延されて 気分が盛り上って来た。 には、定員三百名の椅子をほとん ていたが、午後一時開会するころ の条件に、大会委員の類はくも 快晴のもとに行われるという最悪 いた秋の運動会がみんなこの日の ミナルは押すな押すなの人出の温 週間ぶりの快晴とあって、各ター と埋めつくす盛況にいよいよ大会 日曜日ごとに雨で、きょうは四

乗って、ここに開く大大阪の川柳 西尾 栞氏の明快な舌に

じて市民の文化向上を目指し、一 氏が主催者として登壇。川柳を通 人でも多く市民の参加を願って本 市社会教育課長山本健二

民文化祭の行事に協力した。 を担って企画と運営にあたり本年 麻生路郎氏 詩、川柳の各大会には、いずれも の市民文化祭には、短歌、俳句、 本連盟が連絡機関となり恒例の市 挨拶 関西短詩文学連盟理事長 共催者としての一端

この種の連盟結成が企図されてい る。このことの先だつ九月八日金 では、本連盟同様の機構結成が最 て、日本の短詩文学の地位を高 を述べ、横のつながりを強くし 社会性」という演題のもとに卑見 沢市で北国新聞社主催の北国川柳 近発足され、金沢その他にも着々 られることとなり、すでに名古屋 都市に於いても多大な関心を寄せ め、やがては国際ベン大会の一翼 大会に招かれた際「短詩型文学と 昨年、本連盟が関西に誕生、各

> をもになうところまで押し進めね いと、火のような情熱を述べられ を遂げるよう諸氏のご協力を得た 盛大になり本連盟がいよいよ発展 にバトンを渡したい。これを機会 をこの目的達成に捧げ、次代の人 ばならないという意味を申上げ に川柳を始め短詩文学がますます た。微力ながら私の余生の全精力

と司会者の紹介にもあるとおり氏 ある。それだけに氏の講演も熱が が「川柳雑誌社」が参加したので の主宰する「川柳文学社」と、わ 承知のことである。本大会には氏 の講演は定評があることは先刻ご ったのである。 人氏は、ペンもよし弁さらによし 入り堂々四十分間聴衆を魅了しさ 講演「わがままな川柳」堀口塊

「川柳」として独立したのであ 俳諧、前句附を経てきた川柳は

> うに。人間は人間でありたい、そ る。好きなことを言う、言いたい ま」の伝統は今なお続いている。 ことを言う、川柳のもつ「わがま 由に十七音に生かすことである。 ままに詠んで、そのわがままを自 れがわがままである。川柳はわが 立場からわがままなことを言うよ たとえば税金で苦しむ人は、その

雰囲気をかもし出していた。 む会場風景も市民川柳大会らしい 席題 交叉点 高校生のお嬢さんが句箋と取組 自転車 川村好郎氏選 富岡淡舟氏選

る。文学博士魚澄惣五郎氏。 演「泉は流れる限り泉であ

の市民のための市民川柳大会であ 人だけの市民川柳大会でなく、真 澄先生の講演がそれである。川柳 て見られなかったものの一つに魚 今日までの市民川柳大会に曾っ

> ある。利久のなきがらがそのまま 絶えず新しいものをこんこんと湧 うにする。これが問題である。彫 からびたような価値のないものを けた時のそのカンナ層や、蛙の干 せねばならない。 を守るより常に新しいものを追及 の茶道ではダメなのである。伝統 泉は流れる限り泉であるように、 刻の世界のミケランジェロやロダ 何とか権威づけて、それを大切そ も、利久のままの茶道ではダメで き出さねばならない。茶道にして 伝統を追うだけでは意味がない。 ン、文芸の世界の芭蕉等の芸術の 歴史というものは、長柄橋を架

創るべく次の句へかかるのである でも守っていず、すぐ次の名句を 進むべきである。 しいものへ新しいものえと人間は いつまでも後生大事に守らず、新 あるが、その一つの昔という事を 名句が生れたら、それをいつま 歴史や伝統は重んじるものでは

手を壇上の諸先生に浴びせ、 ものを感じさせたのである。 にも例年の川柳大会とはちがっ 開会からずつと聴衆は感激の拍 22

けられて、いよいよ余興の登場で と休憩。ここで堕上の机等が片附 な道具が興味をひく。 などが持ちだされて相当大がかり ある。ドンデン返しのキャンバス 魚澄先生の意義深い講演が終る

いけん画伯 余興「リズム漫画」指導藤原せ

ましたよ」と、お世辞を言われる けん氏に「こどもさん遠に食われ 拍手が爆発する。客席でこれをご ドのリズムに合わせて「一休さん ほど、大受けである。 感心されていたし、塊人氏はせい 人を描き、犬が出ると犬を描く、 から幕が開く。歌詞に人が出ると 置になっていた魚澄先生もヒドク も出来上るという趣向でヤンヤの レコードが終ると同時に絵のほう 二名、女子四名が、童謡のレコー て編成された豆画伯が六人、男子 愛い坊ちゃんや、嬢ちゃんによっ 小学一年生から四年生までの可

天然色である。かてて総出演で、 後の「菊」は、これまでの木炭画と れがたちまちネール首相と象が出 と画紙へ横書に文字を入れるとそ ちがって、クレパスを使っての総 きん来日にしたネール首相の画だ まるで絵のサーカスのようである 来る。フィサーレともいうべき最 が、せいけん画伯が、ネールさん 七番目の「ネールさん」は、さい を描く子、田のカガシを描く子と 全員出場して、山を描く子、汽車 豪華版である。 (年生のお嬢さんが特別出演とい 「汽車」という大作で、これには 「赤いリボン」「茶釜」の次は

あろう。

(地) むし芋のおひるが届く米ド

吉田圭井堂

ころ

けませんよ」とせいけん画伯ご自 「あの菊はちょっと大人でも描 だけではないようだ。 いのか、考える人はロダンの名作 もいあわせ、われわれはこれでよ は急である。魚澄先生のお話とお この世界も、新しいものへの追及

もやっていないとのことである。 慢の秘蔵ッ子お嬢さんである。 このリズム漫画は、世界のどこ



大会余話

氏菜尾西

4

の方の協力によるもので これは川柳人以外の市民 く、真の意味でいう市民 が売切れたことである。 売れたが、「川柳文学 の川柳大会であるいい例 川柳人だけの大会でな 「川柳雑誌」もよく

1184

う美しさで錦上を飾られ たことも特筆ものであ 多数出席され、菊花と競 喜代子さんほか女流作家 故食満南北先生の奥様

親

次々と自己紹介をする。 五十三の明るい顔が、

(天) 好きなそばとって重役屋に

々庵氏選 兼題「泣き笑い」中島生 重役」若本多久志 米」武田北州氏選

文化祭市民川柳大会の幕 によって結ばれ、ここに 閉会の辞 戸奈日之介氏 に富むプログラムも手際 めでたく32年度大阪市民 わしい和やかな行事も、 よく進み、文化祭にふさ 盛り沢山のバラエティ

がおりたのである。 るものがあった。 拍手が鳴りやまず、椅子にもどれ れてか、その美しい眼にきらり光 ずうれしい立往生をされ、感激さ が挨拶に起立されると期せずして (人) 去る者は追わずと笑う腹は 兼題「泣き笑い」中島生々庵選

(天) お互の涙を笑う幕が下り 泣き笑い街のネオンは無表 菊田いさむ 金沢 貞子 長谷川三司

(人) 白米に眼の色かえたことも 兼題「米」 りつぶし 泣き黒子今日は芽出度く途 武田北州選

(人) 重役の肚清濁を合わせ吞み (天)米櫃に米あり夫に逆らわず 地)重役の名で傍系へ左遷され 伊藤 若本多久志選 永田都詩子 定子

ら抜けて来られた川柳愛には頭が されたような面ざしが印象的だっ た。入院中の土井文蝶氏が病院か 市教委の片山氏や福隅氏のホッと

えましい。川柳文学社の人々、特 下った。天をとられた中島小石さ に食満南北氏の未亡人喜代子さん んと長谷川三司氏には、大向から 「天」「天」と声がかかるのもほほ (天) ベタルふむ暮し額の皺深し (人) 自転車で廻る村長親しまれ (軸) 重役になれぬ夫へ編みつづ 席題 自轉車 自転車で産婆は月を見て帰

(人) 変叉点ゆるい鼻緒が気にか 席題 交叉点 交叉点渡って老婆のびをす 内藤きさ子 富岡淡舟選

中島 小石

正本 水客

(天)交叉点渡れば元の千鳥足 (三才市、市教委、毎日新聞社から星賞) 岡島 孤舟

(文責・一三夫





い事であろうなどと想像しておっ 統を引いて定めて憂鬱な人達が多 の土着した処でもあるから、其伝 ないであろう。况んや流罪の人々 荒波に晒された荒凉の孤島に過ぎ く、海岸線も短く、始終日本海の 佐渡を見るまでは、其土地も狭

籤者のみではなかったようであっ ら岬までの屈曲の多い海岸線など 山、遠く連なる大きな島影、岬か を望見し得るのであるが、其高い 半を過ぐる頃から遙かに佐渡連山 佐渡両津港に入る。出帆後一時間 後二時出帆、後五時半やや後れて から、こがね丸(六〇〇頓)で午 る心地もしたのであった。 て、まるで大陸を遠い海上から見 に、先ず以て驚かされるのは独り 昭和三十二年五月十七日新潟港

平野に近代的な建物が長く細く続 る両津市は、海に沿った蜿蜒たる 整った良い市である。海から眺め いていて、稍繁華な良港である。 両津は人口三万五千、家なみの

> も中々侮り難いものがある。 ○頓、定員七五○人)おけさ丸 定員一二〇〇人)こがね丸(六〇 れぞれのバスに迎えられて、雑作 て新潟から、ゆめじ丸へ八〇〇頓 なく八方に散り去って行く。そし 江津から、こしぢ丸(二八〇頓) 一往復があるから、其交通輸送量 (五〇〇頓、定員七〇〇人)が各 一往復、通計一日三便三往復。直 五百人を勢え、上陸後直ちにそ から吐き出される群衆は常に三

佐渡は新潟から海上三十二マイ

者等には、見逃す事の出来ない最 県管內佐渡郡として一郡を為して 周囲二一七杆、人口十三万。新潟 ら、同じ新潟県下でも比較的肥沃 地に移出すると言うのであるか の年産額二十四万石、内半分は内 重要な選挙地盤であるらしい。米 を持っておる。自然国会議員候補 おるが同県が各郡中第一等の広さ ル、船で約二時間半から三時間。 な平野が展開していると見てよい

納言などは同じ流罪であっても、 的な蔭口を叩く者もあった。 却て此地に楽隠居の出来た事を喜 此広い佐渡に追いやられた小倉大 んだ事であろうなどと至極非同情 鬼界ヶ島の俊覧などに比ぶれば

悲哀を感じていない様である。 ら、此地の人々は一向離れ小島の 海底が稍豊富である外、工業生産

材に恵まれ、農産、林産、畜産、

には佐渡味噌の内地移出もあるか

多い景勝の地である。全島木材竹 も高い。海岸線も稍長くて屈曲の 佐渡牛は内地に移出されて、其名 坪に余る牛馬の放牧地があり、 裾野とも見らるる高原には一万 山は其頂に残雪を見せており、其

設備を誇っておるのである。 登録国際観光旅館として近代的な 中八幡の観光ホテル八幡館は政府 には立派な宿がいくつもあり、就 測所が置かれ、両津、相川、八幡 が一つある。農事試験場、気象観 島內高等学校四つ、內農業高校

島内交通には汽車、 電車こそ無

海抜一、一七三米の高峯金北

文化人の流に属する筈だ」と、バ を汲む「現代の佐渡人は総て上流 であったのであるから、之れの血 れを問わず皆昔の政治犯であっ の一部が此島に追いやられたのは 日野資朝、観世元清、小倉大納言 のを非常に嫌っておるのである。 処せられた兇徒の血を引く、鬼畜 て、寧ろ当時のインテリ層の人々 疑いのない事実であっても、其何 などを初めとし、数多の反逆の徒 にも等しいものの一党と見られる なる程、順徳上皇や日蓮上人や 佐渡人は、昔の鉱失や、 流罪に

ある。 物語っていると自負しているので 聖武天皇敕願による佐渡国分寺の あり、民芸に鬼太鼓、文弥人形、 など、文化の早くから拓けた事を 港した頃から佐渡は其補助港とな 治初期五港の一つとして新潟を開 跡には国宝薬師如来像があり、明 無名異焼の勝れた工芸品がある。 小獅子の舞などがあり。竹細工、 って外国船の入港も頻繁であった 民謡に佐渡おけさ、

本悌二郎の両氏を初め文筆家土田 現代に於いても、有田八郎、山 悲劇の将軍本間政晴の諸氏

其運転手と、バスカイドだけでも のがあり、観光バスも行き届いて いが、定期バスの運行頻々たるも から、大したものである。 常に百五十名が働いておると言う

スガイドは説明するのであった。

は此地の出身であり、其他各界の 有名人が輩出している事を誇って いるのである。

ある。 ある。然しそれでも過去三百年の 事実で、相川の町は元和の頃には 宝の山としておったのは厳然たる 地の最大の誇りであろう。慶長六 足るものであったと、これ亦佐渡 鉱脈の偉大さは全世界にも誇るに 長きに渉って黄金を出し続けた其 となって人口僅に壱万三千內外、 と伝えられるが、今は殆んど廃鉱 として此地を押え、其栄華を賄う 年金鉱発見以来幕府は其財政の礎 人の負け惜しみならぬ自慢の種で 静かに昔を偲んで眠っておる感が 浦廻りと言い、 十六キロ、九十九折の此海岸を七 八口十万を数えるまでに繁昌した 相川から島の南端二見港まで約 佐渡の金山は何を措いても、此 双股岩、白島、

壁であって、 川から島の北端弾崎まで五〇キロ 婦岩、猫岩などの奇勝がある。相 れ延長五里に過ぎないし、川幅亦 淡水湖であったが近年其出入口を がある。 斧で切り削った様な奇岩重畳の絶 の海岸には二十米乃至百米の雄大 才がない。島内唯一の川は驚く勿 ここにカキを養殖しておるなど如 切り開いて鹹水湖となっている。 な断崖が連続し、中でも尖閣湾は 加茂の湖は周囲十七キロ、昔は ここに 遊覧船の 運航

狭いが、之れを以て年産式拾四万 石の米作灌漑に利用して珍重され て居るのである。

年九月御躬ら命を絶たれたと伝 う。新潟交通社は此地に展望台や る承久の乱後北条義時の為に佐渡 あった地で、黒木を皮付きの儘御 売店を設けて観光客を退屈させな に移され、在島二十二年、仁治三 造営になったので此名があると伝 、真野御陵は同帝の火葬塚であ 黒木御所跡は順徳上皇の仮宮の

カ国の法華宗の大棟梁を以て任 大曼陀羅等を蔵して居り、北陸七 北面の武士遠藤為盛、其妻千日 があり、南朝の忠臣日野資明の墓 じ、境内には佐渡唯一の五重の塔 尼、其子盛綱の開基で日蓮上人の 阿仏房妙宣寺は順徳上皇供奉の

たものであった。 店をも出して居るなど中々見上げ である。此外坊内には土産物の売 伽藍維持費の幾分を補っておる様 様である。斯くて之れに因て此大 信徒婦人団の手によって造られる じて食膳を用意して呉れるのであ う設備を持っており、料理と賄は って、同時に式百人位の昼食を賄 此寺では団体観光客の求めに応

た由緒の寺で、水牛の皮を張った んで難行苦行の裡に開目妙を著し 配流された時一草庵三昧堂を結 根来等は文永八年日蓮上人此地

> 呉れたり、 うのは別に不思議な事ではない けさ」を声高くかかげて、観光客 ませて呉れる処に興味がある。 たり、語ったりして観光客を楽し の浪花節「佐渡情話」を聞かせて ドルを採り乍らも、寿々木米若調 言かも知れないが、観光バス周遊 が、其男の運転手君までが、ハン 正調「佐渡おけさ」を聞かせて貰 約六時間、此間バスガイド嬢から 誘致に努めて居る。と言っては過 佐渡は流罪哀史と民謡「佐渡お 車掌嬢と掛合いで明っ

海上安全の護符を呉れるなど、外 出発の前には美しい観光地図や絵 の未然防止に努めておるが、此短 では見られないサービス振りであ い停車の間にお茶を接待したり、 薬書の一組を呉れたり、帰路には ンジンの点検をする等、バス事故 観光バス会社前では一応バスエ

に育った運転手、車掌等とそ正調 自負しておるのである。果して此 おけさを伝承するに適材であると えるに足らず、佐渡に生れ、佐渡 連では、ほんとうのおけさ節を伝 の踊りを公開して居るのである 頃から民謡佐渡おけさ、相川甚句 るのである。流転のはげしい芸者 運転手君であるのは親しみが持て 線、笛、太鼓)は総て観光バスの が、其踊り子は総て観光バスのガ があって、ここで毎夜八時五十分 イド嬢であり、其地方(唄、三味 八幡の観光ホテルにはステージ

> 判らないのを遺憾に思う。 おったかどうかは不粋の筆者には 席で見る芸者の夫れよりも勝れて ステージに見る佐渡おけさが、宴

デルにしたものだと聞いたのであ すべて此バスガイドの踊り姿をモ 伝ボスターのあの踊り子の構図は 全国各鉄道駅に見る佐渡観光官

った猫の名から出たものだと聞い た、真偽の程は保証の限りでない。 と言うのは其昔、某女の飼ってお たものであるらしい。「おけさ 能登半島の突端からの海路を言っ 観光客誘致に奔走、之れ努めてお 渡は四十九里波の上」と言うのは るのはたのもしい事である。「佐 要するに佐渡は全島を挙げて、

戯れて居る洋服男も見受けられ のあの藺の編笠を、日除けに被っ まいまでに鈴成りの満員であ 快速で走って行く。其甲板は処せ た。土産に買って来たおけさ踊り 海にきらめく初夏の陽光を浴びて ーの小瓶を甞め尽して誰れ彼れと て、ポケットに忍ばせたウヰスキ 五月十八日帰りの船ゆめじ丸は

佐渡を出る 流されてもみたいと佐渡 を賞めて居る レコードもおけさで船は

り、心ゆくまで名句を味って、 作の糧にしたいからである。

句会に希

70

本 多

久 志

けることであるが、心なき選者の ではないであろう。 仕業哉と思うのは独り筆者ばかり な風景は、本社句会でもよく見か その作家達が、精魂尽した句箋も 柳家の面ざしは実に真剣である。 抜いて貰おうと張り切って集る川 **糾層の様に投げ出されて居る哀れ** 度び没になると、選者の周辺に の句会でも、今日こそは天位に 作句道場とまで言われる、

へ返して下さい。 亡骸も丁寧に一括して主催者の処 どうか選者先生達よ、没句箋の

手下手が、その雰囲気に影響する 句会というものは披講振りの上

して貰いたい。 そして、先輩、文蝶氏が主張する 五客、三才だけの復唱は是非実行 くそでも尊敬したくなるのである 選者に会うと、たとえ軸吟は下手 緊張して聞き入る作家達の胸に、 ピンピンと触れる様な披講振りの って、馬鹿丁寧ではだれてくる、 んな名句も死んでしまう、かと言 自分の句が抜ける抜けない 早口でぞんざいな披講では、 創よ

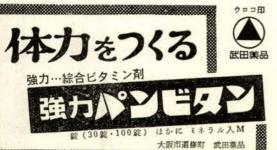
て、所謂、選者級の人がその兼席 だ)川柳大会等へ招聘されて行っ るが、よく地方の(いやな言葉 これは路郎先生の 御説でもあ

とったり、取られたりする事は、

題で天位賞を貰ったり、カップを

もなるのではなかろうか。 あり、一般作家への指導、啓発に ことがその人達へのエチケットで 実にどうかと思われる。 入選に価した場合は別に披講する 作句は自由であるが、若しそれが 或は、選者級の人が自ら省みて 選者級といえども投句や席題の

ると思う。 投句しない事も賢明な一策でもあ 宣言多渊





富 野 鞍

害する手本よ』とて、太刀のき に飛び落ち、貫かってぞ失せに っさきを口に含み、馬より逆さ の殿ばら、日本一の剛の者の自

ろに作っている。 これに興味をもって、いろい 朝日将軍薄氷をほんに踏み 義仲は薄い氷をきようで踏み (万安七

ども働かず、かかりしかども今 も知らずして、馬をさっと打て 氷は張ったりけり。深田ありと

と書かれてあるので、

入相ばかりの事なるに、薄

原へかけ給ふ。頃は正月二十一

「木曾殿はただ一騎、栗津の松

非が行くへのおぼつかなさに、

詠んでいる。 論語泰伯第八の文句にかけて と薄氷が張っていたことを、

ひて、既に御首をば賜りけり。

高くさしあげ、大音声をあげて やがて首をば太刀の先に貫き、

『この日頃、日本国中に鬼神と

と放つ。木曾殿内兜を射させ、

てかかり、よっぴいて、ひよう 住人三浦の石田の次郎為久追っ ふり仰ぎ給ふ所を、相模の国の

の頭におし当てて、うつぶし給

いた手なれば、兜の真っ甲を馬

ふ所を、石田が郎等二人落ちあ

泥水を末期に木曾は吞み給ひ **晴嵐に泥だらけなる放れ馬** やみやみと朝日は泥の中で消 (タル一〇六) H.

功ならず勢田の朝日は無駄に 木曾殿も栗津ヶ原は夕日也 朝日もふ栗津の原は逢魔時 木曾山は朝日栗津は夕日也

馬して果てた、勇壮な今井兼 仲の最後を詠まれている。 の晴嵐にかけて、朝日将軍義 など、近江八景のうちの栗津 また、刀をふくんで自ら落

馬から立派に落ちたは兼平 (タル二三)

兼平は立派に落馬した男 (州三五、一二九)

兼平の手本滅多に習はれず 歌平は逆様に名をきつう上げ

兼平も共に深みへつっぱまり

倶利迦羅のやうに兼平落馬す 死水を取っ たは今井一人也 (拾玉、タル五) (タル六二) (万宝八)

北:

時兼平は三十三才であった。 と多く川柳に作られて、この 妾が兄でも兼平はきつい事

をばすべき。これ見給へ、東国 いて『今は誰をかばはむとて軍 るぞや』と名乗りければ、今井

等と、

深田へ馬が足を突こん

だことも作られ

晴嵐にのぼる朝日も 雲隠れ

浦の石田の次郎為久が討ち奉

聞えさせ給ひつる木曾殿をば、

うたかたの栗津に消ゆる御残 (タル一五七) (川六三)

栗津野は雪に朝日の消えた所 (〃 八八) (川田九)

八九) 四() 句を作る顔は月見の顔でなし

借金もしばし忘れて月見バス ふと俺を忘れて見ている月の影

詩人には月は見のがせないモデル 汚れなき心へ月の丸いこと 道

九月句会を延長して日ノ丸KKの 観月バスを利用して鳥取砂丘に、 の名月に、たまたまこの日開催の 「観月吟行」を行った。当日の作 九月八日(旧八月十五日)中秋

五〇錠

吟行 鳥取砂丘観月

元日本海新聞の文芸特集として掲 出抄並びに吟行記は九月十九日地

載された。

ガイド嬢の達者な弁に月が活き 川雑鳥取支部

伝説の池神秘めく月の冴え パスガイド月のクイズであわてさ - 五夜の月酔って居り

孤独感あわれむように月が追い やっぱり飲むんかと月見へついて 多可志

地蔵尊だけが夜中の月を知り 名月へがっかりさせる雲が出る 名月の砂丘二人の影黒い A 民

川柳が入試に

生め殖せのおかげ入試の子がた 八木摩天郎

ドはもっていても狭き門に、可憐 試問題に始めて古川柳が一句俳句 ない。大阪府下の公立高等学校入 な浪人をさせるのは親として忍び はうちの子に限ってと云うプライ が出たようである。世の母親たち おかげで、今年も相当の高校浪人 年は戦争中の生め殖やせの掛声の これは私の拙い句であるが、本 たり

内服でなおす 月二十六回使用致しま ます。一回四錠ずつ く胃痛を迅速に和らげ せ且つ副作用は全然な り新しい粘膜を新生さ てニッシェに肉芽を盛 潰瘍の創面に直接働 潰 湯 式會 一株

寺を建立した。

ところが、俳人芭蕉が、此

が今から楽しみである。(F) が川柳に詠まれた彼女に接しるの

に次いで「巴御前」を頂いている 美人である。鞍馬氏から「源義仲 スより強いのだろうが、なかなか 姿が兄でも栗津のは立派なり

とした義仲。当時の武人のは 粟津ケ原で、三十一才を最後 入り、翌三年一月二十一日に、 二年(11八三)七月京都へ て旗挙げして、ようやく寿永 七才で、以仁王の令旨を奉じ かなさというものであろう。 治承四年(一一八〇)二十 なから半じやくで仕舞ったは 朝日の光を奪ったは星月夜 妹巴は義仲の妻であ こんな何もある。 (タル二九)

は清盛を諷している。 た。星月夜は鎌倉をいったも である。朝日は義仲、夕日 鎌倉頼 タ日も入り果てて星月夜 朝の時世となっ (タル一〇四) (》| 二七)

軍木曾義仲之塚」がある。 提のため、その塚の側に義仲 都東山坂下弁天町に「朝日将 が義仲の首を持ち帰って埋め たと伝えられる墓があり、京 かって「義仲塚」が建てら 義仲の遺骸は、 国司佐々木高頼が、義仲菩 木曾福島の興福寺には、巴 その後、天文年間、近江 栗津の傍に

名庵にしばらく居たことがあ ねて一泊し、 り、その時、 処が気に入り、義仲寺内の無 木曾殿と背中あはする夜 伊勢の又玄が訪

いる。 芭蕉の作のように誤伝されて 中あはせの寒さ哉」と誤り、 と詠んだ。この 寒哉 何が後世「背

葬った。これをまた、川柳は 義仲寺へ運び、義仲塚の隣へ したので、門人は遺骸をこの 元祿七年芭蕉が大阪で終命 「流と武勇と背中くらべ也

寒い管朝日を背負った名句也 木曾殿は風雅な手向不断聞き 世を去った翁朝日と後ろ合ひ 0 0 11 六つ 七七 二九

再婚したので、 ていたが、粟津で生捕りにな **義仲はずっと戦場へも同行し** 鎌倉へ送られ、 妻の巴は、大力の美人で、 んでいる。 和田義盛と

り、頼朝の娘と結婚していた 冠者義高は、さきに人質とな 巴については別に詳録する 義仲の嫡子(巴の子)清水 義仲寺に和田内とした銀包 柳家はうがっている。 (タル一玉四)

人女傑巴御前があった。女プロレ

馬天狗や宮本武蔵の中に、ただ

いうことになる。 まであったから、それが生れ 永三年四月、鎌倉を脱出 た朝比奈義秀は義仲の嫡流と た巴は、義仲の子を孕んだま た。ところが、和田へ再婚し た。頼朝の討手はそれを追 が、頼朝が殺すときいて、 武蔵の入間河原で殺し

との味

NW 2 QX S

心斉橋大丸北の辻東へ

(タル四〇)

憲法のよろめきとでも云うような 賴まれて、あやめ池の菊人形「日 オツカナイ菊人形を観てきた。鞍 本英雄剣豪伝絵巻」という、平和 近鉄ニュース十一月号の原 人形巴 御 前

がって落ちつきもあり、真面目で いてうれしかった。若い役者とち のあの声を、ボクらはしつかと聞 宰する「天守閣」句会できく披譴 もついて好演技をみせる。氏が主 枚ふえたであろう盛況である。 り芸の再現で、なかなかの好評で 子まで出て、大入袋が又楽屋に一 ある。その日は平日なのに補助橋 師の師匠である故曾我廼家十郎当 台詞もたしかだったし、舞台度胸 天真氏は、旅商人勘平に扮して 一番目の「握り飯奇談」は十吾

んでくれた。 これは芝居ッ気はなれて心から喜 のカステラに、川柳役者天真氏は 見舞にとんだ。路郎主幹心づくし もあるのが好ましい。 舞台が終ると直ぐ林さんと部屋

達も、これからウント川柳を勉強 題として出た。親達も中学の先生 は、社会試験にも落第しますね。 せんと俳句か川柳か判らんようで と並んでアッチーブメント式の問 て客席へもどる。 に一しょに出席することを約束し なしを作る会」へ出席して"笑 い』を勉強したいという。十一月

氏は前号に書いたボクの「小ば

川柳役者

田都詩子さんら川柳人が五、六人 の堀口塊人氏や、川雑友の会の永 さんと二人でゆくことになった。 にお伴して、宮島天真氏激励のた 生は病気でおやすみなので社の林 め文楽座へ行く筈であったが、先 ボクらの前列には、川柳文学社 家庭劇の十月公演に、路郎主幹 不二田一三夫

アクションのないのがこの人のよ

るとき、懐紙を出してハナをかむ に扮した天真氏、かみ手へ退場す

最後の「集団心中」では老人B

シグサがある。舞台でオーバー、

がやはり天真氏声援に来ておられ ンだからでもある。 しいと思ったのもボクが天真ファ いとこだが、ちょっと一工夫がほ 北国川柳大会に 老人Bに扮した天真氏へ 生地でよし 老け役のメー

キアップは

さから、凡そかけ離れて確かに拝 の講話は、題名から来る固くるし じた。先生の短詩型文学と社会性 で見たとき矢張り懐しいものを感 お見受けする人達の雅号を兼席題 箋へ書くのも短冊で出句したほど るものに出席する機会を得た。句 聴に値する多くのものを味わされ の世間知らずでした。川柳雑誌で 九月八日私は始めて川柳大会な

7 斉 藤

れ短評をされておられるのには敬 が北国柳壇の雑詠に一々メモをさ 芸欄に発表された)先生程の大家 ました。(9月27日の北国紙上学 意を表さざるを得ません。



水 莊

みでしょう。前号につづいて九州 味、海と山と川との三つの味、そ は忘れる事は出来ない。行く先々 といわれてもやつばり旅の楽しさ れは旅人でなければ味えない楽し 湯の宿の朝風呂の 路郎

司のふぐ料理

の旅をつづけます。

なのは当然と思います。 にある門司にもふぐ料理がさかん 下関と海峡をへだてて指呼の間

ひれ酒で醉えず二次会三次 河豚で醉い 鯛をくさしまぐろをくさし **炊まされた儘で居てほしふ** 生々庵

まり、地元や門司博多、東京京阪 が下関の「ふぐ市」唐戸市場に集 方へ、とぶように売れる。年間 遠くは玄海灘でとれる。それ 農後水

> のは刺身です。腹を割って内臓を 見た目にきれいで、たべてうまい ○種、ピンからキリまであるが、 はとても美しい。 て皿の染付模様がすいてみえるの 半透明だから、うすく切って大皿 抜き、皮をはいでからよく水洗い 本ふぐ(トラフグ)が一番うま したものだと思います。種類は七 して一億二千万円というからたい の水揚げは、一〇〇万貫、金額に べていつばいにする。身をとおし に真中から花ビラのように丸く並 したのを刺身にする。ふぐの身は い。ふぐ料理にもいろいろあるが

し」などと昔からよくいわれてい ものになるわけです。またそれに のなのでふぐ料理にはちりがつき ともにふぐちりにするのはよく知 したものがかならず出されます。 つくのがヒレ酒である。ふぐのヒ られています。大体ふぐは冬のも もの、白子などはぶつ切りの身と レを焼いてかんをした清酒にした 「ふぐは食いたしいのちはおし ゆびきといって皮を湯に通した

> るが、一流のふぐ料理専門の料理 人の調理したものなら安心してた べられます。

博多の水だき

鶏を追えば踏切越して逃げ があくびをしたとつんぼ 屋の女房になったお 毒 句 仙

くして煮る。そしてまた別にして プに冷やした肉をもどし火力を弱 する。そして鶏を煮てできたスー えす。骨ばなれをよくするために で、すくいとりすぐに冷水に入れ 時間位煮る。鍋から穴しゃくし ておいて骨つきを一寸ぐらいに がよい。生肉のところは別にとっ 水だきが何んといっても本場でし てひやす。これを二、三度くりか つきの切ったのをそれに入れて ツ切りにする。鍋に水を入れて骨 ょう。鶏はエサをよくやった若鶏 は全国に普及されているが博多の 理で水だきといえば、今で

> ころもある。又スープに飯を入れ うまい。タレの容器にうつし、塩 きは博多の代表的名物でしょう。 る。名物の博多人形と共に、水だ 季節のものを加えてたべさせると なら春菊、秋は松茸というように ないのが古式だが、豆腐ねぎ、春 ぼり汁を入れてのむ。野菜を添え を適量、きざんだネギや生姜のし に肉を浸してたべる。又スープが に醬油、砂糖小量と味の素、それ おいた肉を入れる。タレはポン酢

> > もあります。

柳川市の柳川なべ

暑そうな陽へ泥鰌屋は割き 美錠丸

が伝っています。 の発祥地柳川市にそのなべの由来 への旅情をそそります。柳川なべ た印象的な詩句があつめられ柳川 風景写真を添えた、この町を歌っ もひで」では詩情に富むその町の 郷土だ。大正初期の白秋詩集「お い柳川市は掘割りのあるのどかな 詩人北原白秋の生地として名高

じようのほかにうなぎの名産地で 長谷健氏の小説にもでている、ど うだ。また最近には、火野葦平、 いう、それが柳川鍋の起こりだそ ところ、将軍はこれを賞味したと

(次は長崎へー

忙わしい

山 田 季

替

賀へ帰省。 10月5日、 次男博志を連れて滋

7日、午前中貴生川駅へ荷物発送 6日、水口を六時に出て京都、 て滋賀へ帰る。 席。春巣先生の柳話だけで退場し 屋市読書グループの川柳会へ出 出席予定を変更して春巣先生の芦 先生宅へも伺い姫路の鉄道川柳会 阪の知人を訪ね、十二時北川春巣

社句会出席。 の帰途、 五時に大阪の正本水客氏と日本 黄瀬美秋氏を訪問。

せわしい句の旅だ。



観光の雨へ屋号の

同

じ傘

同

光

孤立主義といグループも気に入らず

泣けるときグループ寄って泣いてくれ

グループのステップ春の風に乗り

七面山 十九平 九呂平

ループに必ず寄附する村のボス

周

甫

横丁のここらに電燈欲しいとこ 借りがあり一寸横丁それて行き 横丁のぬかるみ市からも放っとかれ 午前二時まだ横丁は派手 な 横丁に自慢の腕があるの 横丁へまぎれ込んだ刑事 横丁で乗捨てられた自家 横丁の灯は二次会を待って居り

周

義 幽

(人) 横丁へ曲って転んだとこを撫で

九呂平 七面山

沙智子

むじな

(佳) 横丁を出てイヤリング胸を張 (佳) 横丁の名物として生 (住) 横丁を派手に出て行く東西 (住)横丁の日向は配給みたいに

き残

0

笑 萬 恵二 朗

木

(軸) 鴈治郎横丁へチボが走り (天)横丁に住んで落語に似た幕 (地)横丁に来てハイヒール痛くなり

込

ループが来て引越しの手が余り

光

主婦グループ夫操縦法でもめ

雄

用

進之助

(住)横丁に猫と一緒に

囲

れ

静 馬 不二

横丁へ美談の主をさがし 当 横丁へ廻れば風も向きを 変 看板のない横丁のこのま し

十九平

0 九

眼

明

城

切の秘密をグループ持ちつつけ

義 同

郎夫

えら方ばかりでグループついてこす

ループの長老恐要家で知られ

鶴

グループの一人が酔えず世話を焼き

凡 甦 薬

倉 光

ループの別れ一駅乗って呉れ 身の一階でグループ夜を更し

グ 中 島 生

k 庵

選



1 ループに椅子が足らない喫茶店 ループから足あらいたい恋がある ループにへその曲ったい。混 ループを脱けた一人にある野心 プの否めぬ一人へ気をつかい ブを上手になって抜けてゆき 三四郎 ーン十 実 虹 萬 男 要 里



早起きのグループお宮の掃除もし

秀 豐

グループの一人はアロハ着ておらず 皆同じバッジで娘美しい グループの列が乱れて坂となり

沙智子

(住)グループと別れ介抱されて居る

よし子

圭

水

(佳) 団結を誓い鉢巻派 手に

しめ

たけお

井

蛙月

梢

(住)下位がループ仲良く黒星続くなり

(住)グループを骨抜きにする金をまき

(住)グループの一人と知らずくさして居

牧

グループの笑い集めている写真 オジサマもクルーアなのよとおどらす気

忠二朗

グループの気安さ女将も出てしゃべり クループへ暮しがわかって 見栄を捨て グループを避けて落目の日が続き グループの無口にいつもリュドされ 未亡人会で再婚切り出 麻雀のグループらしい妻のかん グループに囲まれ知事は黙否権 グループの案外なのが先に嫁き 何企んでいるかグループ動き出し それぞれにグルーノあっての汚職らし グループの才媛一番嫁きおくれ 子供等のグループ宣伝車が止り 末席もグループである面 グループで停めたタクシー無理だつせ グループの新婚だけは追いかえし グループで声援してもカネ グループの車座になる良いプラ グループの一人暦を持って来る グループは一文もない日が続き グループをここでまいたの縄のれん プの暫い崩し た 色男 世 構 " Ž. 代仕男 幽迷庵 美音子 南牛子 静観堂 圭井堂 鬼 昌 春 Ŧ. 不 初 辰 静 味 狂 木 どんたく 隆 男 扮 魚 雄 美 容 甫 始 兆 馬 W. 文

> 横 T

須

崎

豆

秋

横丁を曲り 曲 朝帰り横丁ばかり

れば元

0

隧

波

容

古

すみ江 たけお 幽迷庵

光

昌

男

24

1

通

り抜

け

路

(天)グループの皆んな天狗の顔で来る

(地)グループで値切り一人だけが買い

宗太郎

F.

横丁になるほどここの寿司の味

三四郎

嚴

(人)プリンスを囲むグループ毛並ぶる

横丁を曲ってネクタイ締めなおし 横丁に住んで大きなことを言い 横丁へ曲ればしんみり三味の音 横丁へ時計はずして借りてくる 横丁から昨夜のお客送り 出 小説に書かれ横丁の名が知られ 横丁はお風にやっと日が 横丁に入って財布をたしかめる 横丁に鳥居を書いて「すべからず」 横丁に紅一点という ポ 横丁に入れば日本の裏が 一寸顔貸せと横丁へ連れ込まれ 当 見 ス b ŀ 元 圭井堂 秀 庸 薬 芳 葵 祥 牧 定 鵜 如 月 光 (ti 月 汀 要 郎 丘蛤

> あの横丁までは覚えていた土産 横丁でもらった包み明けて見る ここがうまいという横丁へ友を連れ 横丁へ質屋は小さく灯をかかげ 八の字に蛇の目横丁へ消えてゆき 横丁の地獄屋敷へ連れ込 十燭光横丁の塀へ突き 横丁のどぶ板を踏むハイヒー

武

助

一日を生きて横丁の酒とな

0

するむ

よし子

横丁で一つになった二人 連 此所からは脂粉の匂いする横丁 横丁へ曲って夜なき笛を 横丁の暗だしぬけに犬が 吠 横丁にそれてサンドは息を入れ 横丁の稲荷旦那も 拝 ま さ 横丁に粋な爪弾き 聞 か 吹 す 10 光 初忠 恒 一舟 三郎鶴遊

アベックがすうっと横丁へそれてゆき 7 里雄甫



指 導

戶 田 方

句、すべて何等かの意味で襟を正 させる厳粛さをもっています。 こと。真理に通じます。一人一 は「虚」の反対で「空ら」でない 「み」とも「みのり」とも、父 いよ深まりゆく感じ。「実」は 「じつ」とも読めます。「実」と 彼岸の中日を前にして秋もいよ 細い枝鈴生りの実へ耐えに 三四郎

めているのです。 写生句。そして深い偶意をも秘

実行の出来る口約魅力なし

りと子が出来る」を思い出します くみにいわんとするところをい と、もう一息ということを知りま すが、古川柳「律気岩まじりまじ す。「まじりまじり」はじつにた ぐっと川柳色が出てきてはいま 実直の年子年子へ又はらか

> と思います。ほんとの立派な等ち はそう簡単にはゆかないことを知 穿ちで片付けてしまうのはどうか といえば穿ちがないと承知出来な 柳を川柳らしくするもので、川柳 ます。一体穿ちというものは、川 いという方もありますが、腰軽く か、仲々手際よく穿ちが生きてい うれしい悲鳴か、悲しい悲鳴 ねばなりません。

リルがなければ生き甲斐がないと す。そして不安です。といってス きない日約にはスリルがありま いたところがあります。実行ので とれも穿ちの句です。一寸標語め

いう現代人ですが。

所詮わたくしどもは慾望のとり 実直を買われ汚職で返礼し

つくしています。

恙なく苦労が実る子沢山

こ。この句の場合の実直がどこま

じつめれば反対のものではなく汚 いますが、この実直と汚職はせん 巧としては比較対照の形をとって のでなく、慾望に克つ心をみがい でいたのでした。 職する心は、その実直の中に住ん ていくのが人間陶冶なのです。技 でほんとのものであったか、飲望 敗けるのは仕方がないと逃げる

ては此の句の方がととのっていま は前の句よりは軽いが、表現とし なんでしょう。煩悩のあつかい方 があります。だがそれがほんとう つまらない。やっぱり飲心に関係 熟れた実が隣の庭へおちたのでは 只の叙景ではありません。折角 根越し 熟れた実が落ちそう隣へ垣

められ 田舎より実のある子とすす

す。「実」を「じつ」とよませる この句。たんたんとしたなにか情 ずれとも迷わずに前進することで 味が感じられます。 送って来た見合写真は気に入らな い。形の真実か、心の真実か、い 都会にいる息子に故郷の両親が 実家より届いた栗の粒揃

実」があります。 実家の「実」や栗の「実」だけ

逝き 隆 女実直に生きてお金も貯めず

方により多く、より強くひかれる でなく、心のこもる「粒揃い」の

思ってみたりします。 直ものは損をする」といいます ながら不完全なのでしょう。「正 この実直もほんとうらしくみえ

にまで押し上げられてゆきます。 た。「実」は真実の実、宗教的なもの をおきすぎたきらいがありまし の扱い方というか、ねらいに重点 を合し 落つる身の落さぬ事実に掌 自

うはっきりします。「瞳つる」さ 真実中の真実なのでしょう。 きは地獄。墮さぬぞよの親心こそ 米秋の実りしだいの歳の 暮

暮」を思わせるものがあります。 か「何事もあなたまかせの年の く程は風がもてくる落葉かな」と 良寛和尚ほどではなくとも「焚 いつか実を結ぶだろうとい 11

も何か欠点があるんじゃないかと が、損をして得々となっているの 技巧のお話より、課題について

落」を「墮」と変えるといっそ

と思われます。 寸間のびを感じます。それは「悟 り」が説明的語であるためと「結 ぶだろう」の「だろう」のせいだ 前の句と同じ境池なんですが一

に便利です。 らっていますので比較研究するの す。以上三句は大体同じものをね 味えばつきない 地に落ちたところで種子は 春を待ち 味が感じられま 茶の香

鈍感に実に気長な舞扇

ろに真実さを感じるのです。 囲気でしょうか。のんびりとして がからみあって作り出している雰 のものにふれているようです。 すが、この句全体が人生のほんと いますが、間のびしていないとこ 「鈍感」「気長」「舞扇」の文字 「実に」で題にむすびついていま これは又のんびりした句です。 豊作へ案山子まともな顔で

著·米田三男之介裝幀

畔道もわからぬ程に実っている

麻

生 葭

乃

句| 葭乃

送費 定価二百五十円

塔です。各方面から御好評をいただいて居ります。 本書は川柳の母・麻生葭乃女史の異色ある作品の金字 菊半型·函 十円

誌

大阪市住吉区万代西五の二五

発行所

然替口座大阪七五〇五〇番 電話住吉(町)六〇八

だが、そうだといって決してにく 限度をみせられたような司です。 ているのでしょう。人間の感謝の まれてまともな顔をさせてもらっ 稲、豊作ならこそ、案山子もめぐ めません。

のよさといったものを感じます。 にいってありますが、かえって凡 は薄く、「名画めく」など御丁寧 が川柳かなと思わせるほど川柳色 実りの秋の描 晩秋の晴れて柿の実名画め 栗の実の暖く寝ている秋日 写、 「名画めき」

しょう。 つんだ柳眼でみつめた結果なので は表面的なものではなく、修練を したから川柳だという以上にやは 川棚的なものがあります。それ

全

泥

集

麻

生:

葭

乃

選

これも叙景句です。柳人が作句

らぬ」という「山吹」をもってと あまり深く考えないで「実のな 若くいる 山吹の様な男でまだ独身 吹にも似てをばいつ迄も どんたく すど女

題

迷

信

わ

れ

桔 俊

梗

先表切 費中市本町三丁目三01 十一月十五日 年. 号

> さいさきのよい茶柱を信じきり 迷信に頼り過ぎ子を萎縮 さ

聴診器迷信などを開

流

信心の人が

安

静

破りに

銀

子子

をに感じての作句と思われます。

山吹」のかもしだす淡い感じを充

秋財布※年春に買うとき 迷信がたたり娘は 嫁き 遅 迷信と知って嫁はさから

お神水で癒ってからの信じょう

난

よし子 きさ子 たつよ

揃

られたのでしょうが、やはり、あの

不朽洞賞杯

児島与呂志

社句会で、不朽洞賞を手にしたの である。 遂に感激の日がきた。十月の本

た。夢のようだった一瞬である。 呂志」と言えたほど、與奮してい ったし、生睡をのんでやっと「与 れて声が出なかった。まさかと思 私の句である。しかし、舌がもつ て、あっ、私の句だ、間違いなく ある。天の句、上五、中七と聞い 兼題の最後は待望の「良縁」で 郎先生の不朽洞賞杯をかけた

> 出来なかった。 のふるえるのを、どうすることも の拍手にまだあがっている私は手 であった。カップを受けた時のあ きかせて今日まで努力してきたの めば、それだけカップを握る日が それから四年三カ月目に、ようや 遅れるのであると、私自身に云い 出席している私である。一カ月休 喜びをひそかに期して毎月休まず く握り得たカップであった。この

になみなみと酌いでくれる。うれ れないが、とにかくグラスカップ る。財政上あまり大きいのではや 盃やな」と要もよろこんでくれ 帰宅すると、「お父ちゃん、祝

句 報 拜

暖簾がモノを言う。 リ組んだ手堅さも、誌輪八八号の 子氏。大森娯句楽氏を始めガッチ 発行浜田久米雄氏、編集永松東岸 備前」A列5号・8ページ=

部だよりあり編集の苦心のあとが ラリならんだとこはさすがと思わ せる。表紙に淀川句抄を飾り、支 木村水堂諸氏のほかに好作家がズ あろう。若本多久志、西森花村、 誌齢六四号も武部香林氏の功績で 「淀川」A列5号・4ページョ

に努力」 しい哉。「一に出席」そして「二 だと思った。

見える。句会案内を二カ月前に予 告するあたり支部報のありかたに

夫婦」で入選したことがあるが

見

いて学ぶ点が多い。

F

十月号)

迷信と知りつつ受ける母 の 快復期迷信そろそろばからしく 旅立ちへ母の迷信 逆ら 迷信と知りつつ家風まもりぬき 迷信を母 迷信を鼻であしらう昭和の 迷信を気にせぬ若さ頼もしく 迷信と知っててやはり迷わされ 母の云う迷 迷信にこだわり縁談はかどらず 大安にきめて引越し荷をまとめ 迷信を信じ医者にもかけずおり 迷信を信じて結構 遠 者 で 居 迷信を信じる姑へさから 縷の望みもう迷信と云 一帰りするにも日柄選っている へ信じた顔をする 信要 へも共 わ つとれず わ 幸水鶴美 風の子 スミ子 史 周 美 貞 陽 子女 甫 子

> 大阪中 ウ花店KK 大ビル·TEL @ 1162

迷信と知りつつす 迷信をすなおに受けるほど弱り 迷信を一家でかつぐ不幸 な 日 迷信を笑っていても日を 選 家内中名前を代えて誰か 病 み 万灯の中の一つを母信じ 迷信を嫁は病気にしてし まい うどん華を見にゆくように誘われる 力的 3 左 び 花代子 沙智子 千代美 都詩子

迷信を打ち消し 迷信も信じたくな 地 無事の知らせまち 10 続 충 雅佐女 初 穂

闘病記藁にもすがりたい

视。

嗣上

都詩子

(前月号天位句はア女さんでした)

のちある句を創れ



投稿規定 本社宛
本社宛
本社宛

本社]1] 柳中秋 句会(大阪市)

午後6 時

10月7

H

於 光 明 #

句をささやくようです。 作の秋です。光明寺庭内 の虫の声

下にまであぶれた人で場内を埋めつくし 央に小型スクリーンが出来上るころは廊 いカラー写真に前景気は上々で、 上映に先きだって、まず空路をどうと 尾崎方正医博の欧米みやげである美し 会場中

米旅行に連れてくださるのです。 れた地図を指して、いよいよ私たちを欧 ったかの説明が、スクリーンの横にはら

が、感嘆の声が期せずして起こりまし 葉氏の映写技師ぶりの才腕にもよります の雄大さ、殊にその夜景の壮麗さには史 は満場拍手の渦でした。ナイヤガラ瀑布 ランスパンのほうが旨いというクダリで にすっかり魅せられてしまいました。 で、特にフランスパンも日本で食べるフ 各国の料理より日本のほうが旨いそう の絶妙の話術に乗って、その傑作写真 れの楽しい旅がはじまります。方正医 スライドはまずワシントンから、

> フエル塔が通天閣より高かったのは残念 川のほうが美しいとのことでした。エッ 大阪ッ子に一番うれしかったのは、ライ ンの流れやセーヌ河よりも、中ノ島の淀 (味尽きないものがあり、われわ

> > 良縁を破談にするかレントゲン

嫁きおくれ

へ娘の恋は

無

視

3

れ

米旅行もそろそろ全巻の終りに近づいて 私だけではなかったようでした。 は、方正医博が帰日されて一番うまか いました。一と言つけ加えておきたいの ンドのあと、ロング・ランを願ったのは たのは西洋料理だったそうです。ザ・エ 各国女性の風俗や、 せられるころ、一時間の楽しい ジュネーブの夜景

王児島与呂志氏が堂々獲得されました。 しい会でした。十月の不朽洞賞杯は新人 席題も今夜は傑作が多く非常に楽

· 没食子·紫香·繁雄·豆秋·庸 明·月都·利武·博也·生々庵·摩天郎 美・進之助・雄声・柳宏子・小松園・恒 む・武助・方正・史葉・立児・楽天・牧 ・鳩花・大和・繁・薫風子・よし・すく を・昌男・多久志・鵜汀・絃月・舟遊・ ・黙平・与呂志・扇子仙・水堂・いさむ 三・洛風・どんたく・旅風・花車・雅堂 ・葉光・好郎・狂二・永断・圭井堂・省 一瓢・楢林・三司・水客・葉乙女・維峯 ・梅里・潮花・季賛・杜的・知恵・鬼 堰子・十倍・晃・高史・清五郎・いわ ・静馬・漣・文秋・淡舟・辰始・義弘 出席者= 栗・一三夫・梅志・淀月・賽

勝気未だ良縁あるを信じ 切り

停電を言うて電化に遠く 居

火葬場も電化極楽 近くな 家庭電化僕にはチロリの秋がよし

電化してみると女中がほしくなり

ローカル線のシャベル電化は知らぬ音

新世帯アイロンだけの電化ぶり

刑務所の電化にこわい椅子があり 井戸端は電化のひがみうまがあい

煙出ぬ汽車に子供は不足 そ う ささやかな電化トースター買うて来る サンマ焼く煙電化 と 別

な味

乗り気金があ け芸に

良縁のなれの果てなる露地住

良縁を断り 良縁と親だけ

古

葉乙女

厨子仙

母様はどこのどなたか電気孵化 仏壇だけ電化に遠い燈をともし 電化電化なぞとヒューズもなおせずに

> 圭井堂 どんたく

一三夫

薫風子

電化して主人が飯を炊かされる

小松園

別に炭団も炭も

場沒食子選

そのスチュリーデス良縁ばかり持ち込まれ 去る者は追わず良縁待つと決め 縁へ次男養子 の肚 をきめ 幽 飄谷 替

良縁かどうかを易に見てもら 良縁へ興信所からケチが つき 良縁を捨てて零号 夫 人 な り 良縁へ父もアチャコの顔になり 良縁ヘライバルだけがケチをつけ 良縁に遠く恩給まで勤め 良縁へあっさり職場捨てて嫁き

豆

秋史

ゲーテの

良縁へあっさりのとり娘を嫁かし 良縁と乗り気の方は断られ 子を信じ良縁すてる気にもなり 良縁ときめた親のが気にいらず 良縁も娘誤植のように言 良縁を逃がし独身主義になり 良縁をカバンに入れて売り歩き アベックで来れば喜ぶ母の 飛びついた良縁サンザ苦労させ 良縁の二世に引継ぐ金 良縁のたった二た間で水入ら家裁からもう良縁が別れ て 良縁で咲いたがまずい実が結び 父母理解良縁として目をつぶる 良縁を姓名学にけ な され 才媛の新婦へ秀才という夫 良縁と仲人だけが決めてお 赤旗が好きで良縁まとまら 御良縁玉の輿とは言わざり 一縁か知らぬが俺は敷かれとり (縁にふられ悪縁つきまと 場に良縁同志 縁のたった二た間で水入らず 縁へ嫁ぎ個性を殺して 縁がときどきさと、泣きに来る にすりゃ此 すれ違 屏 3 0 風 どんたく す十五 む悟郎 薫風子 喜 黙 圭 進 義 水 仙 平 堂 助 弘 堂 楽多游 牧 天志馬人 楽好永立博好舟 知恵美 柳宏子 静生一梅圭 々 馬鹿瓢里堂 郎断児也郎遊

電化してけむりの出ない葬儀所 くじ当てた様に良縁うらやまれ 良縁の方だったなと古稀 電化するダムへ名所が一つ消え 産制とオール電化の 共 電化とは不自由明治の母 なにもかる電化に瓦斯も負けていず 電化の世ローソクっけて易を見る 良縁さと出雲の神をかって出る 良縁で嫁ぎ子宝に 恵 ま 七輪をいてす電化 トースター 一賦とは見えぬ電化の門 構 隣りの電化へ妻の愚痴 兼題 我家の電化第 の停 稼ぎ れ祝 暇 え H ずう 留鬼水多一一義庸杜葉留桶淀豆陽昌梅昌梅雄三美名志瓢夫弘佑的光三林月秋子男里男里声 郎 没与雄文千楽 食呂 子志声秋里天 選

雨もりがするのにテレビ洗濯機 立読み 後 藤 梅 志 選

夜食出して本当に徹夜さず心算り 夜食代にもならぬ薄謝が届いたり 駅前が一軒起きて いた 夜 ちと夜食すぎたと思う胃の重み ごそごそと子供が起きてくる夜 あみだくじ夜食 さあもうひとぶんはりしてやと夜食出し 改食には女将もまじる中華そば 妥結した労使砲食へ息を 事故現場すぐに夜食が届 残業へ届く夜食の 白 またうどんかと夜業箸をとり ドーランのままで夜食の箸を割り 飽屑で手を拭き次工さん 夜 塩昆布があるだけ茶漬した複食 刑事室スリにも夜食出してやり おビールも付けてお師匠さん夜食 ウニがあり海苔あの夜食酒が要り ヤマにして夜食うれしい共稼ぎ 寝てる子を起さぬ音で夜食喰 置いといた夜食の分を子にいかれ 土曜日の夜食子供の分が 決算期寮も夜食の灯をと 夜食にも献立があ 白粉を落し夜食の 夜食喰えば鐘が鳴るなりみおっくし 夜食には客の余りも膳に アルサロで女給の夜食払わされ 大びらに夜食も出来るさし向 夜食までとった残業はかどらず みそ汁と餅の夜食で張 れでまあオールナイト 語り夜食もあったりなかったり 伝っておけばよかった夜食が出 ト廻りして宿直は夜食する 械みな止めて夜食の湯気に立ち ト区切り終えたところで夜食出 の夜食へ上役 を頼む役があり る好 腹 箸 63 をきり を はられ ふえ つき 湯気 景気 た 割 6 0 食 食 乳 0 1) 40 一小た水楢淀阿豆与千三十陽昌 松つ 呂 飄園よ各林月茶秋志里司悟子男 進之助 多久志 秋 1/2 陽省昌葉省黙 1,5 梅 よ 十點史潮黙 静淡阿省季 人志 里 平葉 男 光 馬舟茶 悟

札束も会社の金という 重札束の厚みへ女給みんな お 二日酔の手に札束がふれている。 札束を見せりで言葉が改まり 番札束も会社のない 札束を持てば時々 大穴の手へ札束が 重 札束を見向きもせない意気があり 東にふと良心をためさ 東とは別 に負けて新 0) 財布 聞 C めされ乗 金に 重よ寄払な 雅淡鶇水薰底雄雅 堂舟灯容子風声堂

東の品を夜店で買 席題 菊沢小松園選 P L 方淀

酒の出る席は約束

10

来

3

れるものなり議員に

先約があるとは彼女と逢うっつゆびきりを信じきってる子の

約束を一方的にお 約束が違うと女帯 約束を逃げて映画に恋と 末席のもう約束が出来て

お

せら

12

腦

梅洛恒

正月悟里風明司花男悟

を

L

3 3

三劑昌

本

安

八十翁·医学博士

多年の研究になる古謡本の防筆集

謠 光 ¥380 定価

> 発 行 所 京都市中京区二条通麩屋町東入 檜 店 合資会社

山の湯のわさびを褒めて旅日記 足らぬだけ大阪で買うわさび漬 母屋へも一つ届けたわさ び 忘れまい伊豆の帰りのわさび樽 淡々とわ 姦ましい定連わさびで口を止 もう火を落としましたとかさび漬 さび利かした飲み仲間 漬 8 いわ い杜知 わ

的恵天的を司

席題 わさび IE 本 水 客

子

の作戦酔わせておいて約束し

さんたく

東は

を逃げて映画に恋といっのもう約束が出来ている

雨ついて来た約束

へ伝言 夜

板 ž

漣

東を破り淋しい

を迎

薫風子

東へせ

っぱつまった化粧する の約束が寝させな

潮 昌恒

曜を子

1,3

花男明男

指切りをしたのに父さん忘れんは

公園の隅

へ約束置

いて来

3

れている方が約束 東をきっちり守る金が 東通り返しに来て又借

> 要 6 込な

利省梅

武

日子の約

東を果

世

る <

Н 3 席題

約

尾

崎

方

IE

選

が違うと月賦 の京都訛りが

屋坐り

三志瓢夫

頼

0

札束の中の 札束を見て銀行を 寒 う 札束をつかんだとこでゆり起 頭だけ課長が見える 札東へ女理 札束で僕の良心買 札束が約束よりも 眼を伏せてから札束を突 舞台での札束むぞうさに キャパレーで弱味の札束握らされ 札束が内ボケットから口をきき 骨抜きにする気札束つんで見 札束を妓のぞいた 想 枚 を 拝 崩 薄 10 18 札 出 返 握 0 来 か 3 0 る 束 け 小松園 多久志 い梅堰黙潮月恒高む里子平花都明史 水 い月

気の抜けたわきびのような好きな人物老ふとわさびの味が分りかけ 外人の鼻へわさびが効きすぎる 母ちやんにくれるはわさびのついたとこ サビ抜きにして二食がにぎらされ 粉わさびうちの刺身は家 女の子にぎりのわさびぬいといて 粉わさびの固まったとこひっかかり 何はともあれ山のわさけを母が摺る 踊る海老わさびへ一寸はねてから 粉わさびじゃ板場の腕の知れたもの 本わさびならべにぎりに使ってず おなじみがわさびの味をはめてくれ 常連へわさびの量 も心 わさびさえきかぬ場末の屋台店 背い目にわさびが効かんなと言われ ふる里の酒うましわきびのいいにお わさび好き箸でまぜるも愉しそう 得 0) 味 多久志 水 梅 淡 鵜 い 文 堰 永 進 恒 昌 好 博 史 梅 杜 之 む 秋 子 断 助 明 男 郎 也 葉 里 的 高 垆

> 菓子一つ養老院で 養老院明治

7

院居

生:

れ

0

洛伍者の憩

0

泉

遊 h 顔

成るようになって養老院に入り

草

抵抗をするかと刑事の声になり W判別出来ずサ イク 阿倍野支部句会 菊沢 小松園選 (六阪市)

サイクリング帰りの道の遠いこと 裸でもいやらしくない河童の絵 妻横に視線は裸婦へ流して る 裸婦の絵が店の感じをやわらげる 抵抗のはげしさ語 夜明かしの鉢巻ほども筆乗らず サイクリング雲が見る見る多くなり 裸婦どれも一ぺん生んだらしいあと 然の運に自信をつけばじ イクリング普だんは使いにも行かず 然を老婆は神のせいに る靴 する 0 跡 白伽賀 柳子月峰 六龍子 梅 喜 一三夫 薬 瑕 唐 立 勇 仙 児 也

夢も消えわれ知らめ間に養老院

養老院ホレホレ節

の得意

も居

い 英生 潮

註ホレホレ節は邦人労働者が砂糖耕

心配はない養老院という

捨

M 魔花麗

135

た

う老老楽

떉

地で唄うた民謡調のもの

悔悟して養 食う事が仕事養老

院

70

淚 6

する 暮

院

魔花麗

築山快夢起報

雑川

ワイ支部句会

(ハワイ)

(唐佑清記

国敗れて制服アメ
耳打ちの小さい声 れて制服アメリカ風になり へ「何じゃとて」

赛ころの昔

更に及ば

をぬ

夢悔

養養

小松園秋

工 旋 銀 泉 弦 斧 静 風 浪 快 北 ス 子 風 水 水 月 平 馬 草 助 起 海

ゆかたがけ散歩に西瓜でけて去に 半分は声で判断する近 ゆかた着てやっと女の線になり大柄の浴衣 で 包 む 肉 体 美足音 も 軽 く 三 重 丸 帰る 近視眼落さぬ銭も拾 カリブソにお化の方がギョッとする 近視眼読書の秋をくたびれる 刑事室よごれた浴衣かしこまり 今年から浴衣に単衣帯を 傑作と言われそうかいなと思い 傑作のところどころを虫がく 八頭身浴衣を着てもよく似合い 、魂へネオンサインが邪魔になり - 座はもう浴衣の肌も脱 帰りで浴衣が痛い程に て姚 いて居る 締焼 85 1 1,3 小松園 文曆好 曆 好 梅 葉 十 一 三 佑 郎 里 光 悟 夫 立豆梅 丑児秋志

淀川支部句会 (大阪市)

汗だけは足弱一人 前 足弱を嘲笑けるようにバスが行き トラックの上で足弱元気 出 足弱へバスはなかなか来てくれず 鷲が鳴くから買っ 鷲の声遠 峠まで日 熱帯魚日本の四季を不思議 奥さんはいけずと思う熱 赤電話背中合せで 赤電話今日は土曜の午後と知 お隣の声が邪魔する赤 赤電話家出の相談などし 赤電話男呼び出 どこからか当ててごらんご赤電話 峠茶屋筧の水の茶 か 足の 迎え す声 る 彼 足 を K 5 在 里 変え かき 電 てる 譲 部 L 話 0 香林選 三 三 会 多 久 志 六能子 東洋男 花 香 图 洲 村 子 用

散髮日養老 故郷は夢に見るだ

院

10

<

笑

の沸 け < が

病人の目に耳打ちが気に入らず 耳打ちで旦那が来てることを告げ 司会者へ耳打ちに来るモーニック

一悟とは別

色と金迷い 養老院みな 善 年金で食えず余生 将棋さすだけが日課の養 茶飲友達養老院も

をの 開果

> 養 0 遊

養

老 老

笑笑紅砂黑拝柳

花の留守らし

いセパードだけが吹え

十梅樹逸恒康

達筆と言われながらの

筆 第不精履歴書だけはきゃんと書き 転寝で孤児は瞼の

母と会

(1

川柳堂

制服へ乳房は遠慮なくふく 制服の儘でバイトは世慣れゆき 偶然にしては大き な 出

れ

文

秋

来心

玲

晃

有流茶丘頓山葉舟

Ł を

> 流会へあきらめ切れぬ愚痴になり熱帯魚水道 局の水 に 馴れ 法廷に未練を蹴ったハイヒール 若忠交旋



階借十年 先 0) 夢 を 持

下積みの俺に笑顔の妻が テレビアシテナ二号の家は見上げられ 贅沢な暮しへ階下そっと も 雨水で手を洗っとく一階 黙ってても借金取りは二階まで 心とは別な笑顔で迎 アンテナが故国の声を探 アンテナの高さへ喋べるバスガイド 階借の方が表札出して え 心当て 3 (a あ る 0 水山茶花 東洋男 三十郎 香 人志 林

米子支部句会 (米子市)

無料券選挙の事にするし 風の音何時しか秋の虫も ボケットをさがし夕刊買 片思いしてから吃る嘘を 秋風に和服のよさがよみがえり 小西雄 レストラン友のボケットあてに飲み ボケットの小銭かぞれて酎を飲み 夜道でもカリブソ娘けろりとし いさかって二里の夜道を里 送られる夜道は遠い方がよし 無料でも寝た方がよい歳となり 看板の無料が釣る手占 台風があちらに抜けて梨 つきりと進路の言えぬ気象台 風にさからい女 別 ħ つてやり つき る て行き 安 鳴 天邪鬼 す幸春節美 喜 子子秋枝江 K 定素 一紅 報 閉郎人飄机帆 12

直感はやっぱり嫁がまた 孕 み

一休み終って母がほっと す

あやめ

子

銀河越え受胎しらせフランコハ沸騰

枯

粒

おんぶした網帯・児に夕焼ける

受胎と云うショックを女装いぬ

エキストラ崖から落ちる役がっき

入れては出し利子のつ 間こない貯金

いい花火千円札が焼ける音

間の相物を利子と較べられ

娯句楽

弱気だと笑える男となってしまう 悪いことつづき安値を買いそいれ

九五七年お茶やのおかみ弱気なり

田中島

省報

ゆきら

酔さめて見れが弱気が顔を出し

紫慶白

史 雀

闡

花粉に指をそめて受胎いおはなし

久米雄

声

浜田久米雄報

片思いしているうちに歳がすぎ の進路をさける家が 建 ち 美怪

笑山

倉敷支部句会 (倉敷 治)

中毒になるわと晩酌削ら 中毒の介抱 叱 り 叱 り

たり

御休憩の父娘で部屋に鍵がいり 火焼跡かくす火鉢が据えてあり 金庫の鍵だけはお臍に抱かせる 枯すすきまだまだ一とすじ夢が有り 錠かけて安心してりや釘であけ 運転手気のすすまない客をのせ 偏食の子が中毒を逃がれ とり アル中はいいな無罪で帰って来 遠眼鏡甘い姿をとらえ 風の子水 飴ン坊 風

雑川 篠山支部句会 小西無 **鬼選**

車する 亿 逆 ぎ足 見わ 花 建 えず 柳風子 幸 万 女 仙

仲人の役目が済んだ折を 滞納に首をかしげる家が 帯納へ税吏冷血漢 お迎え火年寄のぐち 迎え火を眺め集金急 迎え火を焚いて不孝を少し詫び 滞納の額へ善人眼をみはり 利子だけをやっと追ってる手内職 終列車花火を残し発 滞納へあの手この手と智恵を出 儲けてることも宣伝する 東葵幽浄竜岸丘谷美泉

(兵庫県)

夢に見た銀座矢張り人の

3号の次が5号と云う病 停年へ大過なかった皺が 寄 国民に聴き捨ならぬ言を吐 公休のポリス聴こえぬ顔で行き クローズアツァマれはスターも皺が見え 申訳繳くちや札で土 産買い 聴き捨てる気頭からよい 聴きすてて出たが動学が高っなり 聴き捨てたつもりが胸にちと残り 番号で振り廻され 一舜はハッと番 号 3 試 返事 験 ば みいる 左文字 雅佐女 よし子 ひか平 永 越 宗 無 鬼 風 軒

落選へ無言でピッをはがしとり ピンカールお釈迦いような髪になり 初

(京都市) ぼんやりがあれで名家の御曹子

用心のよいのが鍵穴までふさぎ

かけた鍵忘れてスポーク又曲り

水 子

子の便り読んで眼鏡がくもりかけ

佳代女

也

京都支部句会

留守ですと云わぬいかりの鍵をかけ 宿題を日焼けした子が忘れて来

同じ日の日焼け二人の仲が知れ 鍵かけているから空巣安心

備前支部

句会

(岡山市)

共稼ぎ妻の鍵には鈴

が鳴り

もったいないもったいないで中毒し 満月が見ているとやないいとキッス逃げ 満月へすすきを活けて一人住み

谷丘春月

運転手の方が冷汗出して止

若き日のスリル鍵穴のぞき見る

鳳

文

子の夢は一等になる 運 ぼんやりが出世頭のクラ ス 裏町のインテリ恋文も書かされる スタートへはんやりしてる子が一人 ぼんやりと記憶をたどる遭難者 ぼんやりへぼんやり前から突きるたり もう一寸見たい夢は浅く 消 ぼんやりはできぬとほんやり考える パチンコで負けてはんやり駅で待ち にが虫が一人居るので言いそびれ にが虫がおかしいほどに愛せられ 二日酔あの顔見よとひやかされ インテリの卵は親を煙に 原子炉のあかり憎しみ越えて行き 動 116 ž ㅎ みすず 愛越吐二三夫 たけし 角と利 俊 半 日 進 見 休

混浴に馴れて湯治に退く つし

混浴と聞いて温泉行きに

なり

たまよ

直原七面山選

金と暇さかさくらげを追い廻し

夢を追う机夕日はグンと落ち

綠之助 代仕男

弓削支部句会

(岡山県)

今此処で同情してはならぬ地位

月 壮

夕暮れて所在を知らす鎌の 音

同情をすれば同病かと恐 肩小さく同情論の中に ととのえるひざへ静かな足の音 カンニング机一と役買っており 屋上で下界に生きる音を 聴 当然のように日曜 出て 今夜こそ許さじ玄関の靴

いる

同情をしますと欠伸かみころし

間借りして二号小唄へ遠慮なく 窓口の機嫌小唄を口ずさみ 雨でよし奈良は詩人の行くところ デバートをうろうろ廻って旅い雨 小唄でも習うか少し金が 出 小唄やっとおぼえた頃に破産をし 味平選 2 久 光 酔

広島支部句会

二号さんとマダム幼い同 級 生手の凹みに心地よき日の化粧水 珍らしい早起マダム P ゴムバンドのばす心地に恋がある ソファーの心地ですっい裏を見て 心地とはそっと背に来る声 なる様になるをその日のマダムとす 扉を押せばマダムのこびが待っており 新用語使ってインテリ振る口調 国弘 を待つ T A (広島市) 休 親つ恒幸尚甫晴 る 生子和男平三芽 司 報

日程を行く 団体 大聖寺支部句 0 会 0 (石川県) そと技 よ雄郎羊仏 品質優良

大阪市東区常築町一丁目十一番地 立川ペン先株式会社 カワゼム カワ画質 出雲支部句 (出雲市)

は当然パパの

IC

綠之助報

歩の渡

ㅎ

雲重柳朱李白虹

平信作紅朋菊路星

予定地をつぎに見送る旅 0 雨 味

巫

虫の声乱さず夜風そよと 吹き 洋館を建ててからのパパとママ 混浴へ妻ためらわず帯を お彼岸の夜風に親を思い 職探す私に夜風まで冷える アベックが夜風にふれて風邪を引き 重恵の窓へ不気味な夜風 吹き 浮気した頻を夜風がそっと撫ぜ たまに逢うべいのおひけへなじまない 不機嫌の父舌打ちをして出かけ パメニママ同じ意見に娘が拗ねる 人だけ来て温泉へ落つ へ画伯構想を提げて 見る Ш けず U き 七面山雲 た只陽の世子 陽知流南千 惠 子美風鉱年 流南千喜竜 風鉱年枝児 仙 丘.

鳥取支部句会 (鳥取市)

着く駅を隣に頼み寝てし 到着順ですと名士のアンケート 恋文の定規にはまった様な文字 ** 恋 うき も れ i 多可志和 幸 水 子 光道 歩 宏

ランデブー我が世の

春の夢心

見せ

天豊青六錦寿義佐

水花花人

ボスと見てかポリスも下から出 停年へまだ乳吞子のあるあせり

平吉男

一秋六

花

B

へボ将棋助言が入ってからあせり

明和病院支部句会 (西宮市)

子沢山せめて子なしへ負い惜した 失業のあせり子供が出来かかり 負け惜しみ今度こそわと又でられ 寝心地を宿屋布団の柄に 気の毒にあせればあせる程ともり

年

坂道を登ればネオンが下に見え

子の網を借りて夜店の魚すくい 夏の夜の夜店に花火かかされず 恋文にもらす吐息は虫も きく 履歴書と同じ楷書のラブレター 嫁ぐ日の心決まって焼くレター ままならぬ恋暗号の文を 書き 夜店の灯とどもゆかたで先に立ち 夜店の灯文化に遠い品を 売 り 夜店の灯消えて星空近く 旧友に逢うてうれしい夜店の灯 十円十円ばかにな ら ぬ 夜 なり 店 三津子 一路報 まどか 多喜女 みつる 節 竜 喜 妙 ょ 路 童 女 代 女

歩

これっぽちの汚れに廻す洗濯機 これ以上大気汚さぬ様に 追伸が二つも付いて 母 弁当が集って 来る 風 汚された青春ひとり爪を ソファーも浅うに掛ける作業服 代談士になって予期せぬ汚れよう 同姓同名思わぬ荷物届けら 書いてみたが結局出さぬ 汚れにも職業別の 色 が 読み返し読みかえしてる恋内気 ふるさとは美し汚れた心 に 到着が遅く上座を当てが わ **神棚へ手紙を上げるいい知ら** よく汚す子等の洗濯まにあわず 噛 0 デ 通 文 む 世 星遊伯

步影星山

小松支部句会 (石川県)

失せ物を見つけ掃除のはかどらず 耳掃除人の耳まで気にか 出張へジョッキの味を思い出し 湯に浸る手足自由な伸びちぢみ 退庁ベル開放された靴が なる 掃き溜めを隣りの塀に寄せて置き 掃除器の隣りは叩きすら買えず 大掃除したと思えぬ 大掃除空びん一つ出ぬく ら 子 沢 か 伊藤茶仏報 b やすえ 寿美絵 千太郎 正柳子 浪

義理の仲土産買うにも気をっかい

里土産首に手足に ふるさとの土産は手製 出張の平にはつらい土産 お土産を抱えたまんま酔いつぶれ

100

3 のようが餅

0

畅

光健

如才なく返信料を

恋に

添え

恵 鬼

秘話として恋文雑誌にのせられる

掃除した部屋客待ちの花におい 大掃除子守り引受け遊ん 宇部 支部句 (字部市) き城宗太郎 松 水

俄か雨素足で帰る 新流感に母は売薬だけ

T

L

の臥

靴 5

格

流感にもれて子供等損の

流感も母さん一番

後

K

よな

伊島 樹 男 石 川

青畳妓の素足を引き 立俄か雨素足で帰る 新調

7

3

3

侃遊四郎

投げ出した素足が白い夏を病

人形を抱いて坊やの 百人形にされて社長の 盲 でカら来日判

大阪ないしる 色 書 日まり 紙 電南七二、七三二 用 短 日日 # 五百五

新築の木の香の中の差し 向残り香というが女にある 強重役も同じ 土 産 で 終 電 絶景をほめて二人は手をつなぎ 子の描いた景色に汽車をなしてやり ニンニクの匂い淋しく友は病み 病床に要 樟脳の匂いもしてるクラ 思い切り花の香りを吸った試歩 湯上りの肌の匂いも若妻のもの 土産物値切って釣り銭忘れて来 お土産を忘れて父さん四面楚歌 夕映えの景色へ一 一泊へ景色はおそえ物で 飲み 絶景と思うばかりで句にならず 清元を教えています残ん の 樟脳の香りの服で退 顔とは別な香り残して女 すぎ いいにおい隣りは旦那まこの日 ビンツケの香りに母のなつかしく 新茶の香ほめて話に花が咲 ふるさとの香り漂う荷物 大風呂敷ひろげて土産持って来ず 愛 用の 人旅 香 院 ス 水 解 0 六 L ひ 絃 夢 杉 舟 東 弘 圀 か る 月 路 野 遊 雲 子 里 す延善明芙すみ む子坊峰路江 夢杉舟東弘圀うつ 路野遊雲子男ろ 留河 利 珠 E 三童平坊姓 西絵女

下関支部句会 石川侃流洞報 (下関市)

出張の温泉行きを気がと

温泉の予算 美しい瞳へー

が 生: 代 棒に 10

え

政

判決へ素直になってい 誤解から逃れて青い空を

3

瞳

女舟

サイダーの中元妻の名で届 サイダーの冷えが戻った サイダーを運ぶ幹事を怒鳴る酔い 乾杯へ皆んな握った大ジョッキ おごられるジョッキは軽く持ち上げる 友情のキャンプそれから夫婦にし キャンプ村月を背負ったまま眠り 水くみの朝をキャンプの顔が合い キャンプ村父もアロハで来て若い キャンプ村何処かで飯の焦げる朝 温もりのある紙幣腹巻から出され 血圧がノイローゼにさす課長連 愛嬌のよい児人手をリレーされ あの頃の母へそっくり片えくぼ 愛嬌を買われて妻の座でおごり 歌手のえくぼが深いアンコール イダーで済む友だから妻笑顔 長 話 3 吞天坊 ほなみ 九呂平 つよし 晃 子 規 蛙 美 楼 里

貯金帳どころか借金置いて死に 貯金帳たまる時かに病みつづき 寄附帳へ又祭りかいなと老眼鏡 祭りから祭りへ学生アルバイト

与呂志

市役所に勤めて並木の世 栄古盛衰で 並 松並木やじきた気取りで通り抜け 弥次喜多も今ならバスで行く並木 女連れ聞かぬことまでつい喋り アルサロのエクボヤっほりもてている 赤ちやんのえくぼは母に似て笑い 生れ付きですはとエクボつつましく 海の子へ大きな朝日登って 来 よせてはかさか波機性者の碑を洗い ぬいで着る手ぎわ女の海 後添えを貰う噂の 畳替え壁の汚れが目立っ て 頼母子を落した金で ふるさとは海の音から夜があける 泳げない五尺八寸 持て余し 海見える宿で貞操うばわ れる アベックを浮べて海は静 海へ行くただそれだけで子ははしゃぎ この海が船を吞んだは嘘 の 置土産大鉈ふるい椅子を 土産だけ赤字と言うによいくらし 何よりの土産婚約 ここからが参道バスを降ろされる 次男から先に参道走り出し 動の草鞋むすん だ 並 麻生路郎先生選 で休む並木路 本決 な 去 畳 橋本幸男報 蓉 0 様 着 0 0 没食子 ハナナ村 よしを 風船堂 没食子 幸 春 竹同 ハナ子 男 巣 巣 正雄

不便なは眺望絶佳 で 補 う 気 機気の見えるベンチは人が掛け すだれ越噴水も見える夏 景 色手鏡にうつした景色の重 い 床 画家の眼が景色をこんな風に狂げ バスガイド窓の景色を唄にのせ 名曲へ詩情をそえる月が 大阪通信病院川柳会(大阪市) 出 薫風子 よしを 太郎

333川柳会

じれったい人並木道歩く だ初孫のエクボ写すに骨が お 杉並木馬蹄のひびきついになし 並木から秋の来たのを教えられ マロニエの並木も撮ってエトランジエ けれ よしを 雄 男在巣

商売を替えてもみたが金 デマいつかこつそり逢かで仲にされ 女秘書デマの渦中にツンと生き もうデマといい現場を見っけられ 台風の過ぎた夜空のきれいすぎ 間借りの身台風少しも気にならず ままごとにこけしうれしい客こなり 想い出は棚のこせんが知っている 熱弁へお酌銚子を持った まま 熱弁の後は淋しい自己 熱弁で通り落選議員で知ら ファッションショー夫の月給フト思い 金詰り慢性ですと 軽 く お 金詰り夫婦喧嘩は派手に 金詰りか知らんが社長の自家用車 番組を変えただけなり旅 芝居 百円も儲けるときは汗をかき 電化の悲哀ここダム底になる部落 ガス水道無いが電化は都会なみ もうこけしより大根買いにゆき や 批 計 判 0 南 雄狂 好 楽郎声二 郎休宗楽 山志歩宗里 美休

郎

待ち合せ来ない同志が結ばれる ハイカーの横をハイカー通り過ぎ

三次

イカーに虹がきれいな登り道

太報

きはち

手相見のタダは気になるここで止め 無料酒を吞ませて後で儲ける気 あみだくじ無料の菓子の味の良さ 無料みたいやナアンサクラが買うてゆき 嬌声の中で毛虫はきょとんとし 毛虫同志やっぱり恋の春と知り 一匹の毛虫へ父ちゃん呼い出され 勇敢なヒールに毛虫踏まれて居 番付けを皺くちゃにしてひいき筋 番付けの不振へ苦悩の日が続き 番付けに応え大物 よく 倒し 番付けにのってテレビに出ぬ力士 貯金帳へそくりしたと書いて居て だるま川柳会 (出雲市) 葉乙女 雅与好甲一利蝶 呂 子 堂志祐朗平武々 繁 京一楼 利蝶辰雅

かん高い女室の隙へ足止 まる受付は美人景気よいらしい 新薬をけなし場治の客と 山蔭の雪も消えそな湯のけむり 鏡野の鳶を見ている一年目 顔見世に来ましただけの 一年目里へ土産の 寸隙見せたら男 年目つんつるてんの初 年も逢わぬ思い 年目子供の服の 年目家風そろそろ板に つき 柏原グループ 孫を連 の -不 丈を足し 埓 小西無 なり 一年目 単年 (兵庫県) れ 衣 、鬼選 知恵美 満寿美 良章三郎 巴 百合子 花代子 たつよ 明 貞周 美 峡

カメラまだ馴れぬ手付きがスード追い

帝化川柳会

(大阪市) 佐野

白 水報

おくれ毛を直すカノラは待たでれる

薬乙女 甲子朗

儲ヘカメラが欲しい子が育ち

春風が詠歌の鈴の余 受付でとうとう風の茶をよばれ 満たされぬ隙間に 春風が裏山へ恋吹 が訪歌の鈴の余韻ひく 富柳会句会 偲 古 S. L (富田林市) 恋げ 康得寿富久 雄郎治江美

親馬鹿を意識しながら子の自慢 倦怠期欠伸を交ぜた返事 する カメラマン腰のかまえの乙なこ またしても自慢じゃないがと御年輩 大あくびしかけた途端ドアがあき あくびしたくっしゃみしたと子煩脳 大あくび手でおおう外へはみ出して 請求書三度書いてもまだくれず 請求書来てから金を借り歩 傘ほせば傘がころがる良い日 請求書こんなに吞んだかと思い 請求書世間ばなしで門払ひ 借り傘を返しに行って又降られ 待ち合せあいつも振られてうな顔 待ち合せバーの女は二人 来る 凡東好梅た 雲 太楼郎里え 歌都路 增治郎 春 周 純 星 紅

吉 一市 絲之助

報

女

梅山

再会もヤアヤアヤアで事がすみ 人生に希望をつなぐ入歯はめ 白衣ぬぎ看護婦世間の娘にかえり 入歯して食道楽は まだ続き 再会へ吞まねばすまぬ友に逢い

万古人

群

朱白虹

星紅菊

婦

人友の会

(鏡野地区)

丸尾潮花選

村郎

季節一品料理 江戸前にぎりずし アペノ橋地下映画食通街

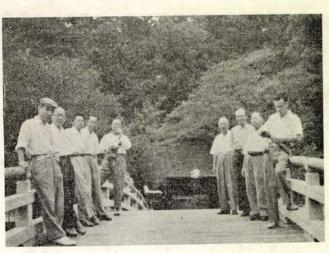
の店

里

遺」路郎先生選

兼題

発表・十一月廿一日 締切 • 十一月十五日 句数五句以内 ★大万川柳(第八十一回)を募る 阿倍野区松崎町三丁目 大万川柳会宛 (店内揭北)



去る八月末大和

中爲生々庵居

開送三休橋の 八日七時から

柳

鳥ケ辻川柳会は

大阪遞信病院

右氏 郎師

> ▼党任理事会 諸氏出席。

九月二十

された時の記念 日歓迎句会を催

> 度定例の理事 で開催。本年

尾崎方正医博帰 室生寺で一泊

に方正医博撮影

没食子氏 幸桃神 男氏 村峰氏

日、場所を浜 を十二月一 き協議。日時 区)開催に献 会総宝 (A地

寺諏訪森の中

島氏本宅に決

募を

朽 办 洞 明寺で、大阪市 から下寺町の光 九月十三日七時 市民川柳大会 委員会—— 里、

不

会

多久志、文鰈、淡舟、与呂志、い からは路郎氏出席のもとに、市教 委及び連盟から委嘱された大会委 九回市民川柳大会の委員会を開き さむ、三司、没食子、十倍、 香、いさむ、三司、好郎、白水、 席され、大会委員の担当部門やそ 灯、大黄諸氏が出席された。 の北州、杏花、巳之介、 洋男、水堂、白柳子、一三夫、 秋、賀峰、水客、潮花、 から生々庵、栞、梅志、潮花、紫 の他の協議を決定した。不朽洞会 主催側から片山、福隅、路郎氏出 恒明、与呂志、十悟、一三夫、小 六日七時から下寺町の光明寺で 市民川柳大会委員会——九月二 梅志諸氏の他に、川柳文学社 水昌、 操子、 梅 古 東 豆

文学連盟主催の六阪市民文化祭第 大阪市教育委員会及び関西短詩

> 子、古方、摩天郎、豆秋諸氏。川 柳文学社からは塊人、北州、古灯 松園、文蝶、没食子、水堂、白柳

新春号へ貴方

★原稿締切は十一月 分の一段組三行。 幾口でも申込んで 末日着便 ます一トロ分は五 雅号程度。活字指 下さい一トロ分の 定はおまかせ願い 原稿は住所と姓と

告廣賀年歓交人

よろしい

本多省三氏(大阪市)正会員 ★ 新会員 一三夫氏推薦 十月入会 好郎、

菜、多久志。

多

文蝶、恒明、 生々庵、小石、 の出席者は、 定した。当日

が、読物は多彩で本誌のカラーに で次号へまわすことにしました 家の二十四時」これは編集の都合 は今月休ませて頂きます。 先生が御病気で「新川柳鑑賞」 集 録 音・ 一川柳

不朽洞会から生々庵、栞、古方、

員が参集し、種々協議を行った。

市教委から片山、福隅両氏、連盟

の年賀広告を ★一トロ金二百円。 ★広告料は前金のこ と(郵券代用でも

III 柳 雑 誌 社

る。私の一日の安息所はしまい風 で、何も考えないことにしてい 時間だけはノートもベンもないの 足、浴場の客は私一人です。この ろになる。それから午前一時を打 屋が閉ねて帰宅すると十一時半ご 館内売店へ、妻と交替に走る。小 なんてロクスッポ聞いたことがな つまで雑誌の仕事をする。 ン」と一つ鳴るとフロ屋へかけ 夕刻には布施市の場末の映画

の選考委員を先生がされる。ただ ▼本年もまた、市民文化賞受賞者 遺憾はないと自負しています。 人、わが川柳陣営からの委員で

とも川柳の一歩前淮 とならんで大阪市民 あることに、私はか 強々々。 ならないと思う。勉 それに応えなければ あるが、われわれも を意味するものでは 文化祭に参加したこ つて詩、短歌、俳句 のです。 ぎりない誇りをもつ 作品」において、 短詩文学連盟によ

を私も書くには書く もっともらしいこと が、その実、虫の声 ▼虫すだく秋ーと、

> る。映画館の店でノートしておい と四時までまた雑誌の仕事をす りません。 る。四時に牛乳屋が売るのでそれ 新聞屋が来るまで私の仕事をす をシオに仕事をやめて、こんどは 呂にあるのです。フロから帰える 所で犬を飼っている家が一軒もあ こんでくれている。そう言えば近 の人たちは、盗難防止になると喜 友だちが言うのです。だが、近所 私のことを、朝を知らない男だと 内二十五日間続くのです。だから にはわからない。こんな日が月の 虫が鳴いていたのでしょうが、私 スリ寝てしまいます。その間にも た、川柳や原稿等を整理してゲッ

〇三夫



世界最高水準

-			1						
所題時	所題時	所題時	所題時	所題時		所題時	所題時	所題時	所題時
小松旬会 化 日 (金) 七 時落葉・見合	25 日(日)六時半南海旬会	12 日 (火) 六時半割勘・弥次馬割勘・弥次馬	堺市高須町鳥野工業会議室 上機嫌・族・初歩 上機嫌・族・初歩	秀才· 効能· 折詰· 夫人 秀才· 効能· 折詰· 夫人	大 鉄 局 句 会 大阪駅北、北斗寮 大阪駅北、北斗寮 大阪駅北、北斗寮	21 日 (木) 六 時 誕生・鼻・ひよこ (雛)	20 日(水)六時指紋・人工衛星・間一髪	東淀川町便局東淀川郵便局	空相山町「空・清水白柳子居 たね たね 時
所題時	所題時	所題時	所題時	所顧時	所題時	所題時	所題時	所題時	所題時
岡山第五鉄道寮 屋根・腰痛・旗・シルにやく・乱れ 回山 句 会	久米郡久米南町&福直原七面山 人妻・口説く・浮気・抱擁・接吻 人妻・口説く・浮気・抱擁・接吻	鷹野橋電停前・總田屋旅館借家・転換・痛快 情家・転換・痛快	中川区岩塚町西恩寺 17日(日) 17日(日) 一山瀬・投売り・(課題) 一山	下 関 句 会下 関 句 会	東区恩田長沢津秋六花居便り・夕方・トタン 3 会字部句会	四条郷手・仲源寺 可条郷手・仲源寺	12日(火)一時お稲荷さん・削る・食慾	高 敷 句 会 塩・呼び捨て・綱・スリ	** 子 句 会 ** 子 句 会 ** 子 句 会





五四三 会日 座談 場 大阪中央放送局第一スタジオ場 大阪中央放送局第一スタジオー 部 (放送録音用) 東西冬番・小野十三郎・喜志和三・竹中郎 (五十名 年氏の詩の教授 大阪 詩挨第 第場時 話拶二 0 会 示 配につ 民 関西知島文學連盟·大阪中央放発局 大阪市。大阪市教育委員会 文化祭第 一詩の 슾 (五十音順)

printed in Japan

昭昭 大阪市住吉島区內万代西五丁目 B 版市住吉局区内万代西五丁目二五番地 JI 行所 行印國人 列5 号 JI 雜 柳雜誌 毎月 麻 生: 定 月一 月十五日印刷 六〇〇円 日発行 月 価 幸 第十一一号卷 五〇円 五番地 H 発 社 RE

る。 員に限る。 への投句は不朽洞会

▼投句は各種必ず別紙に認め、仕 を募る。 「近作柳樽」は一般作家の雑吟 を募る。 投 稿 規 は誰でも投句が出 定 雜吟 住

文章(評論 作柳樽(姚林廿旬以内 塔(雑 . 研究

近

回空

(中旬以內) 民野 文庫選(中旬以內) 中村九呂平選(中旬以內) 長野 文庫選(中旬以內) 中村九呂平選(中旬以內) 中村九呂平選(中旬以內) 中村九呂平選(中旬以內) 中村九呂平選(中旬以內) 中村九呂平遇(中旬以內)

n

寄メ

・感想其他) 脉 麻北麻 生川生 路春路 郎巣郎 選選選

募 題 吟夢

集

から

人者たしか

秋。秋。秋の

特急こうや号

全座席指定制 山上まで 1時間50分 なんば発

8.40 (毎 日) 13.20 (毎土曜)

宿坊クーボン 1,400円

なんばから 往復運賃 1泊2食つき



南海交通社 @ 103 - @ 5038





伝統と不断の新研究を 高き香の中に生かす

三共の本格的養毛料 (強力女性ホルモン人)

フケ、カユミ、抜毛、薄毛、若禿の防止、美髪保存に

₩150, ₩250, ₩420, ₩1,000

著明そ過的詩 も 絶川 教に作いあいが・は やれは伝統的であ 答えている 中七音に b 生 川柳の作り方と味い方 路郎 n b れ庶民の偽らざる声 生り、いかいい 先生著 声 は ・嗚咽――そうした がいかにして発生し がいかにして発生し が来に動くか、し が来に動くか、し 本斯方来に動 何 であ

であ

たもろ

送価 三五 円円

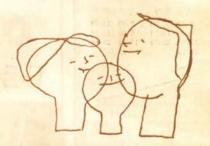
かい

し、革に静の

も経新短

東京都新宿区払方町27 振替東京29507

一家そろつてホーライ党





大阪なんば。TEL @ 551-2